

春日市の民俗 3

むかしの生活誌

小倉区編

春日市郷土史研究会



伯玄社の丘 (昭和37年)

序 文

坂口の山から停車場まで何一つなく田圃ばかり。春は麦の穂が黄いろに色どりカラシの花が一面に咲きみだれていかにものどかな春の一日。また、夏は今の光町・宝町・大和町一帯は全部が水田で蛙がガアガア鳴き、いかにも夏らしく、秋は黄金色の稲がたわわに稔り、春夏秋冬大自然の変わりゆく田圃の風景。それは大正時代の忘れ得ぬ想い出の一つである。

小学校から帰ると風呂敷包み（ザツノウ代り）をあがり口に投げ捨て、ガメ山（今の若葉台）に蜂退治、ヒョウヒョウを頭からかぶり竹の先で巢を落し多く取った者が勝ち。また、ミソソチユウ、野苺、山ブドウ、桑の実ちぎり、木に登れば山モモ、椋の実など、野の幸山の幸で一杯。これがまたうまかったこと!!

次は魚取り（うおとり）、アンチャンが川に入ってシヨウケで魚をすくえば弟（てこがい持ち）は土手の上で待っている。ドンボウ、ゲール、ナマズなど沢山の川の幸。ポンチンを着てウズブロウている子供達の姿、これ等も還らない昔の懐かしい想い出の一コマである。

また、汽車通学をしていたときは、坂口から、水城駅を発車する汽車が「ボオー」という汽笛を聞き、うす煙のあがるのを見てからザツノウを小脇にかかえて一生懸命走れば間に合う時代。これが昭和の初期であった。

現代ほどその変遷の熾烈さを痛感させられる時代はないでしょう。現代社会があれば必ずしも必ず過去がある。

人間の記憶は時がたつにつれて忘れがちである。今、ここに昔の姿を後世に書き残そうと大きなバッグを肩にかけカメラを片手に東奔西走、労苦を重ねて聞き取り調査をしている人々がある。

それは春日市郷土史研究会の山田会長を初めとする会員の方々である。うすれゆく「ふるさと」の大正時代の調査に取りくまれコツコツと、或る時は時のたつのも忘れ、寢食を忘れて自分の納得のゆくまで調査され、その目的達成に情熱を燃やしておられる。その姿には心から敬意を表し、限らない讃辞をおくると共に感謝の念で一杯である。

その実績がみのり、ここに「むかしの生活誌・小倉区編」が一冊の本となつて発刊される運びとなつたことは誠に同慶に堪えないところである。

郷土史研究会の方々の労苦を偲びこの貴重な冊子を多くの人々に読んでいただくことを切望する。最後になつたが、会員の皆様の今後の益々のご精進を切に祈念する次第である。

昭和五十八年十月

小倉区長 成 吉 重 春

はじめに

本書は春日市郷土史研究会が昭和五十七年二月から五十八年九月までの間、数回にわたって小倉区の民俗調査を行い、その結果を一般向きにまとめたものであります。

内容は大正時代の習俗を中心としたもので、さきに刊行した「春日区編」「須玖区・岡本区編」に続くものです。今回の調査で痛切に感じましたことは、昭和の今日、私たちは物質面では非常に恵まれた生活をしていますが、他方では近隣との意志の疎通は必ずしも円滑とは言い難いのに較べて、六、七十年前の大正時代までは物質面では日常生活は想像以上に貧しかったにもかかわらず、本書中の「親睦」「オコモリ」などの行事にもみられるように人々が相寄り、相集って生活を楽しんでいくということでした。そこには土の中から生れた郷土の生活があったという感じがします。

私たちが古めかしいと思われるむかしの生活に執心して、これを記録しておこうとするのは、これに心をひかれるからで、古老といわれるお年よりをわずらわすのもそのためであります。

このたび、さいわい私たちの意のあるところを諒解され、こころよくご協力をいただき貴重な資料を提供され、本書を編むことができましたことに対し、ここに小倉区の皆様に厚くお礼を申し上げる次第です。

昭和五十八年十月

春日市郷土史研究会 会員一同

目次

一、	序	文	
二、	はじめに		
三、	大正時代までの小倉部落の沿革と地誌……………		1
	1 資料に残る小字名	2 資料に残る戸数・人口・田圃・租税・牛馬・その他の物産	
四、	人々 生活……………		6
	1 部落の共有物	2 部落の構成	
		3 年齢集団	
五、	家族構成……………		25
	1 家族の呼称	2 相続	
		3 所帯ゆずり	
		4 隠居	
		5 分家	
	6 同族集団	7 檀家	
六、	住居……………		27
	1 屋敷	2 垣根と庭木	
	5 造作のまゑに	6 建て方	
	9 屋根	10 新築祝い	
	14 ニワ	15 風呂場	
	19 居間の間取り	20 借家	
七、	服飾……………		33
	1 仕事着	2 衣類の修理	
		3 機	
		4 髪型	
		5 下駄	
		6 コーヤ	
八、	食習……………		34
	1 平常の食事	2 晴れの食事	
		3 味噌	
		4 漬ケモン	
		5 保存食	

15	トコアゲ	16	産後の禁忌・俗信	17	出産見舞い	18	お宮参り
19	モモカ	20	初正月	21	初節句	22	初誕生
24	オゼンスワリ	26	一人前	23	ホウソウ		
十四、 婚 姻.....							

1	適齢期	2	通婚圏	3	仲人	4	見合い	5	シルシ
6	ムコイリ	7	ヨメイリ	8	オ茶ノミ	8	仲人への謝礼		
10	青年団への謝礼	11	嫁の里アルキ						
十六、 葬 送.....									

1	死後の処置	2	死亡通知	3	湯灌	4	経カタビラ	5	夜トギ
6	葬礼用品の調達	7	穴掘り	8	納棺	9	出棺	10	葬列
11	埋葬	12	灰ヨセ	13	俗信	14	同齡感覚	15	法事
十七、 民間療法.....									

十八、 諺と言い習わし.....									
十九、 民話「伯玄どん」.....									

1	夜さりの田すき	2	畦ぬり	3	仕事上手	4	肥取り	5	縄ない
二十、 小倉区関係生活年表.....									
あとがき.....									

大正時代までの小倉部落の

沿革と地誌

小倉部落の歴史は古く、まだ、わからないところが多
さんありますが、記録としては『筑前国統風土記』に「
此村の高き丘の上に大なる墓三六あり、所々に散存す。
是をあげば、其内は古墓也」と記されています。

弥生時代と古墳時代の遺跡が多い春日市の中で、特に
伯玄社遺跡のカメ棺墓群および大南の銅鐸と銅戈の鑄型
西方の銅矛、紅葉ヶ丘の銅戈等の出土品は小倉区が「須玖
・岡本遺跡」につぐ重要な遺跡であることを証明してい
ます。

「小倉」という地名は、小高いところを意味するとい
う説があります。小倉の字（あざ）名にサヤノマへ、ナ
ラヒ、ヘハラなどが残っていることは、小倉の地がすで
に古代から開られていたことを物語っています。

小倉が文献に現われるのは、鎌倉時代の承久二年（一
二二〇）です。石清水田中家文書に「筑前国小倉莊二五
町は弥勤寺領（大分県宇佐宮の神宮寺）」とあります。宇
佐宮造営のための荘園として管理されていたものでし
う。

室町時代の天文十二年（一五四三）筑前国住吉村の妙円
寺住職念管上人が浄土宗復興のため、三方所の末寺を建
立し布教につとめられました。その一寺が小倉村に創
建された無量寺です。その後この無量寺は火災のため廢
寺となるのですが、江戸時代の文政十二年（一八二九）須
玖村に住む筑紫の代官富永氏の懇願により須玖村に再建
され現在にいたっています。



白木喜四郎翁の碑

江戸時代の終り頃、小倉村保正（大庄屋）白水喜四郎
は干害に苦しむ農民の水利開発のため、小倉新池から灌
漑水路（仕掛け溝）を引く偉業をなし遂げました。その
顕彰碑は住吉神社境内にあります。

神社には住吉神社、八龍宮、伯玄社があり、また仏教



空から見た春日市(昭和40年代初めごろ)

の系統をひく弁財天、薬師堂、上の山観音堂、地藏堂の堂宇もあります。いづれも昔から村の守護神仏として崇敬されたものばかりです。

子弟の教育機関として、明治に至り、同六年須玖村の武末六平氏宅地に須玖小学校が開設され、明治三十五年以後は昇町に春日尋常小学校としてひきつがれました。明治二十二年（一八八九）市町村制施行により小倉村須玖村、春日村、上白水村、下白水村の五カ村が合併して春日村が誕生しました。

大正三年（一九一四）に小倉村に電灯がつけました。同十三年の九州鉄道開通・春日原駅設置は、その後の小倉区発展に大きく貢献しました。



住吉神社

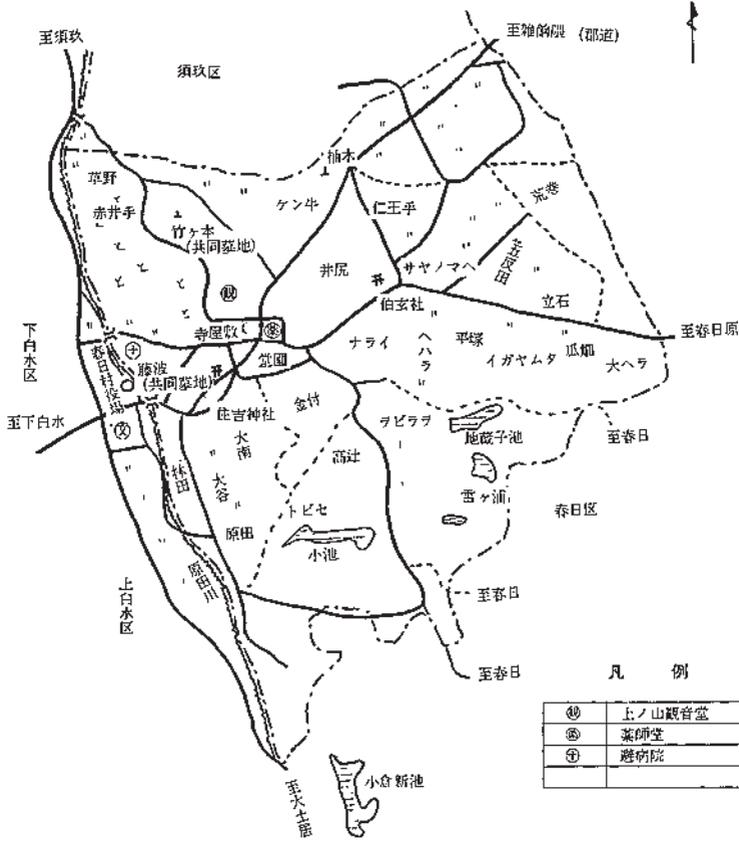
資料に残る小字（こあざ）名

明治時代作製の「小倉区字図」（小倉区蔵）より

金付	大ヘラ	永田	荒卷	五反田
立石	上立石	瓜畑	イガヤムタ	ヘワラ
平著	地藏子	雪ヶ浦	上池田	
下池田	堂園	新池	池ノ下	松添
サヤノ前	樋ノ口	古賀ノ本	カモウラ	
添	魚ノ目	野間畑	大坪	ハタヘ
土穴	井尻	ナライ	ヲヒラヲ	高辻
小池	原田	雨堤	トハセ	トヒセ
林田	大谷	大南	仁王手	野添
柚木	ケン牛	寺屋敷	村中	小浦
藤波	西	竹ヶ本	石橋	草野
赤井手	中ノワサ	平塚	池	クミイケ
原田川				

（計 五九）

大正ごろの小倉区要図



2 資料に残る戸数・人口・田圃

租税・牛馬・その他の物産

『福岡県地誌全誌』（明治四―十年調べ）小倉村

(1) 戸数 七四戸（明治十七年町村戸口調査では七六戸）

(2) 人口 三四四人（男一六五人 女一七九人）

医者 男二人 農業 男八八人 女九八人

雑業 女一人 雇人 男七人 女七人

(3) 田圃（でんぼ）

田畑反別 七二町三反八畝一步

此石高 七九〇石八斗三合三勺

内

○田反別 五五町四反六畝二八歩五厘

此石高 六八三石七斗七升九合五勺

○新田別 二四反二畝一步

此石高 一四石三斗三升六合七勺

○大縄田畑反別 二反四畝一八歩五厘

(4) 租税

（正租）

○米大豆 三六一石一斗二升

此代金 九四六円七二銭三厘

内

○米 三三四石一斗九升七合

此代金 九四六円七二銭三厘

○大豆 二六石九斗二升三合

此代金 一一七円二四銭七厘

（雑税）

○米大豆 一〇石八斗三升四合

此代金 三二円九二銭一厘

内

○米 一〇石二升六合

此代金 二八円四〇銭二厘

○大豆 八斗八石

此代金 三円五一銭九厘

(5) 牛馬 五四頭（牛牡三〇 馬牝二四）

(6) 物産

人々の生活

1 部落の共有物

ほとんどの家が農業で、人の転出入もなく、今日ほど現金で物を売り買ひすることの少なかったころ、部落にはいろいろの共有物があり、代々、大切に受け継がれていました。

明治十年前後の各村の調査・統計を収録した『福岡県地誌全誌』（以下『全誌』とする）には共有物や共有財産として次のものが掲載されています。

米 七五五石二斗 麦 四九石二斗
 大豆 一三石八斗 小麦 一四石
 大豆 九石一斗五升 小豆 一石
 大角豆 二石四斗五升 粟 三三石
 蕎麦 一五石 琉球芋 二万八千斤
 大根五万本 綿 四六斤 茶 一〇石
 鶏 一五羽 鶏卵 三五〇〇箇
 榎実 八、八五〇斤 菜種 四五石二斗

(1) 山林 一三町九反四畝九歩

内

- 官林 三町六反六畝二〇歩
- 草山（牛頸・梶原山）三町一反一畝一九歩
- 元拝領山 四町九反八畝一〇歩
- 元證文山 二町一反三畝一〇歩
- 社山 四畝一〇歩

（●）牛頸山・梶原山以外は山林の所在地不明

(2) 池 一〇方所

池の名	水面	水掛田
雪ヶ浦	四反歩	一町歩余
地藏子	七反歩	一町歩
小池	二反八畝	五反歩
七俵	四畝二〇歩	五反歩
キワ殿	四畝六歩	五反歩
大南	三畝六歩	五反歩
金付	三畝二歩	五反歩
堂園	六畝五歩	五反歩
石橋	四畝二歩	四反歩
宮ノ後	二畝四歩	五反歩

(3) 橋 九方所

『全誌』には「橋九所」とあり、全部「石の橋」ということになっていますが、大正から昭和にかけては「七

カ所」で全部が木橋だったということですが。橋はいずれも小さく名前もついていませんでした。橋の所在地と橋の長さ・幅

場所	長さ	幅
火ノ口	一間	三尺
村中	一間二尺	一間
豆塚	一間二尺	五尺
大平尾	二間	一間
松橋	一間	三尺余
立石	一間	三尺余
ハタへ	一間二尺	五尺
野間ノ畑	一間	三尺
草野	一間二尺	一間

(4) 川

- 御汐井川（下井手川）
- 沖ノ川（馬入れ川・原田川）
- 仕掛け溝（五百間水路）

(5) 井手

- 赤井手 下井手 五百間 松添 荒巻 ヲヒララ

(6) 秣場（秣山）

- 牛頸山（現在の「霊園」付近）
- 雪ヶ浦（若葉台西五丁目付近）
- 村山（春日市スポーツセンター）
- ガメ山（春日東中のすぐ北側）
- 瓜畑

(7) 神社・堂宇

- 住吉神社（村中）
- 明治四十四年十二月二十二日、この社に堂園にあつた八竜神社を合祀。

○伯玄社

○上の山観音堂

○宇賀神社（弁財天社）

○地藏堂

○薬師堂（薬院ヤクイにあり）

(8) 庚申塔 二基（薬師堂横住吉宮下）

(9) 墓地 四カ所

- 竹ヶ本（二反六畝一歩）
- 白水・鏡原・稲永・松尾・西村・成吉家共同墓地

元禄十一年(一六九八)の墓碑あり。

○藤波(二二步)

松尾・箕原家共同墓地

天保八年(一八三七)の墓碑名あり。

大正期まで一六墓柱

○大谷(二一步)

永田家の墓・無縁墓あり。

寛政三年(一七九一)の墓碑銘あり。

大正期まで二二墓柱

○柚木(無縁墓地)

(10) 馬捨場(死んだ牛馬の埋葬・解き場)

○柚ノ木(二二三畝)

○大谷

天保三年(一八三二)の馬守護神の石碑あり。

(11) 水車 一基(原田)

麦の粉挽き用

(12) モヤイ風呂 二カ所

(13) 病院

○高橋元仲医院(内科・寺屋敷)

○避病院(藤波)



馬守護神

(14) 火の見櫓(堂園・現堂園ビル前)

(15) 消防ポンプ小屋(堂園・現松尾酒店横)

(16) 腕用式手押しポンプ 一台

(17) 集会所(堂園・現小倉センター)

公会堂といった時代もあります。青年の夜学所として使われたこともあります。

(18) 道路

○郡道(小倉―雑餉隈 大正八年前道路拡張によ

り路幅二間となる)

○草野道(東博多行き道ともいう。路幅 六尺)

○柚木道 (路幅 六尺)

○瀬戸ノ口道(お墓道ともいう。路幅六尺)

○仁王手(路幅六尺)

○原田道(路幅六尺)

○池田道(路幅六尺)

○春日道(路幅六尺)

○村中道(藤波道ともいう。路幅六尺)

○西博多道(路幅六尺)



避病院跡

2 部落の構成

(1) 地下(じげ)の姓と戸数

代々その地に住みついている者を地下の者(じげのもん)とか地の者(じのもの)とかいいました。大正時代まではほとんどが地下の者で占められ、部落外からの転入者は二―三軒にとどまっていました。

大正時代の「姓」と戸数

姓	戸数(戸)
稲 永	15
西 村	13
松 尾	12
白 水	9
白 簀	3
永 田	3
成 吉	1
(合計)	56

(2) 小組と戸数

旧小倉村以来、小組は六つあって戸数は明治のはじめ『全誌』に「人家、本村(六四戸)、原田(五戸)二所ニアリ」とあり、

明治二十二年の統計では七一戸となっています。

近隣の村々がそうであったように、小倉の場合も藩政時代から大正期までは戸数も人口も大きな変動は見られないようです。小倉では庚申塔が二カ所にあるのでこの庚申塔を中心に二つに分けると、ちょうど戸数が同じくら

いになりました。そこで、戸数を二つに分ける必要があるときは「庚申分け(こうしんわけ)しよう」といえば、

小組	戸数
東方	15(一16)
西方	11(一12)
寺屋敷	9
前方	9
大南	11
原田	5
(合計)	60(一62)

手間ひまかからず、自動的に二つに分けることができるようになったそうです。たとえば道作りの公役のような時「庚申分けでいこうえ」といえばすぐ二つに分かれて道の両端から作業が始められるというわけです。

(3) 部落の役員と部落寄り

現在の「区」にあたる行政単位を部落と呼んでいたことがありますが。そのため、いまの区長にあたる役員は部落長と呼ばれた時代もあれば、区長と呼ばれた時代もありました。

同様に区総会にあたる会合は、古めかしく「村寄り」「村中寄り(そんちゆうより)」といわれたり「部落寄

り」といわれたり、いろいろでした。

部落寄りには太鼓で合図をしました。ついでながら、一つたけば部落寄り、二つたけば青年の寄り、三つたときは処女会と決っていました。

部落寄りではおもに、池の栓抜きのこと、田植え始めの日、水取りの規約、田植さん、駄使いさんのヒユウ(日傭)のなまったもの。日当のこと)などを話し合いました。

小組には一人ずつ協議員という部落の役員がいました。部落長のもとに小使いさんがいて、触れまわりをしたり寄りごとのときはお茶出しなどをして部落長の補佐役をしました。副部落長は会計も兼ねていましたので、部落長よりも、手当ては少し多くもらいました。

部落の役員は正月すぎに部落長宅に集まり、一週間ほど「算用寄り(さんようより)」をしました。それは部落の一年間の決算報告書作りをするためです。

この算用寄りは、外部に対しては苦勞の多い大仕事ということになっていましたが、役員の慰勞会も兼ねていましたので、部落長次第では昼の日なかから花札をして遊ぶこともあったそうです。晩には酒サカナのゴツツオ(御馳走)が出ました。

(4) 屋号のある家

小倉には「お座」が二つありました。住吉宮のお座と八龍宮のお座がそれです。住吉の方は二十軒、八龍の方は十二軒でしたが、その株の売り買いがあつて、時代によつてだぶ構成員が替つていきます。

昔、「小倉の十人」ということばがあつたそうです。天保五年の住吉宮の祭礼記録の中に次の一〇名の屋号が書かれ「都合頭人数拾人」としめくられていきます。

- 一 ムカエ名(むかえみよう)
- 二 大宮司名(だいぐうじみよう)
- 三 カウ仏名(かうぶつみよう)
- 四 モリソノ名(もりぞのみよう)
- 五 ヤタラウ丸名(やたらうまるみよう)
- 六 薬院ノ名(やくいのみよう)
- 七 牛丸ノ名(うしまるのみよう)
- 八 ニシノ名(にしのみよう)
- 九 三ツ丸名(みつまるみよう)
- 十 井上ノ名(いのうえのみよう)

「頭人(とうにん)」とは祭礼の世話役を意味します。「小倉の十人」とはいいながら、現在は二十人で、すでに宝暦八年(一七五八)に十九人の名前が出ていますから、時代の流れに従つて株数が殖(ふ)えていったのかも

しれません。



住吉宮祭礼記録

現在に伝わっている屋号に「ムカエ」「井ノ上」「カウ仏」「ヤタラウ丸」「井ノ尻」などがあります。

3 年齢集団

大正から昭和の初めにかけての年齢による組織集団としては (1)子どもたちの集団(特に名称なし) (2)青年団(会)・処女会 (3)婦人会などがありました。

このうち、子どもの集団は別として、青年や婦人団体では、すでに全国的な地域網羅組織の末端として編成され、活動の方針も内容も官制的色彩が一段と濃くなつて

いました。

しかし、青年団の組織や活動の中には藩政時代の名残りがうかがい知られます。

(1) 子どもの集団

小学校の六年生までの男子で各学年五十六人。全体で三〇人から四〇人くらいの人数でした。「子ども会」といった名称も組織も特にあるわけではありませんでしたが、順送りで六年生を「子頭（こがしら）」と呼び、行事の時は子頭が采配を振りました。

義務教育六年を終えて、高等科に行くのが普通の時代になると、高等二年生が子どもの行事の頭（かしら）になることが多くなりました。

① 年中行事

子どもの集団としての行事ばかりでなく、各家での行事もいくつかまじっています。

○ モグラ打ち（一月十四日）

十三日の夕方から十四日の朝にかけて、どの家からも「ジュウヨツカーのモーグラ打ち、隣りのカロ（ド）さいもって行け！」という子どもたちの元気な声が聞こえてきました。モグラ打ちの音が冬の朝夕のしじまを破りました。

○ 嫁ゴの尻叩き（一月十四日）

夜になると、子どもたちは住吉神社に集まり、左義長に参つてくる「嫁ゴさん」の尻をワラ棒で叩いてまわりました。

この行事は、春日小学校の校長であった中島政次郎先生の「尻叩きは野蛮」のひと声で長く中断しました。

○ 白水喜四郎翁のお墓参り（四月二十九日）

春日小学校の四年生以上の児童は、先生に引率されて仕掛け溝造りの大恩人・喜四郎翁の墓参りをしました。四月二十九日は翁の命日です。帰りがけに翁の末孫である西村繁太郎さん宅に立寄り、鉛筆やまんじゅうをもらっていきました。

春日市のもう一人の利水の恩人は須玖の武末新兵衛翁で、こちらも同様に命日の九月四日にお墓参りがありました。接待はやはり末孫の武末須美恵家と武末一（はじめ）家の両家でされていきました。

○ 男の節句（五月五日）

男の子は「デケ（出来）損わんごと」頭にシヨウブの葉で鉢巻きをさせられました。シヨウブの葉の代りにハチク（淡竹）の皮やヨシの葉を使うこともありました。

○ メイ虫取り（六月中旬）

現在の自衛隊福岡地区病院正門前にあった小倉区の共同苗床でメイチュウ（螟虫）取りをしました。取った

メイチュウの量によってご褒美をもらいましたが、二化メイチュウ、二化メイチュウ、メイチュウの蛾(ガ)などの量によって計算の仕方があったようです。何日かおいて三回くらい行われました。

○ タナバタ(七月七日)

七月七日は「田ぼめ」の日でもあり、一家の戸主は早朝の田まわりのときに自分の田をほめながら酒をまいて帰ってきました。子どもは、稲の葉の露をとって習字をしました。



メイ虫取り

この日つくるダゴ(団子)を七夕ダゴといえます。

子どもたちが「夕月様にあげちゃんない」といって、おもてを通って行くので、木戸口のところを床(とこ)をおいてその上に豆かイモをおいておくと、いつのまにか子どもたちが引いていました。

○ 六月堂(七月十七日)

オンビ(御日)にお観音様に池などをつくって模様変えをし、日が暮れて、お参りに来る女(おなご)や子ど

もにお茶やお菓子を出して「お接待」をしました。

子どもたちは、この日のために七月の初めごろから一軒一軒をまわって、五銭、十銭とお金をきってまわりました。

六月堂は日にはそれぞれ違いますが、お薬師様、八龍宮、弁財天、住吉宮上ノ山のお観音さまでもありました。

○ 虫祭り(七月二十八日)

この日は旧那珂郡の虫追いの日でもありましたので、他の部落と競争で虫追いの鉦・太鼓を鳴らしました。

小倉部落では、春日神社の神主さん(星野さん)を呼んできて、村境に御幣を立てて、お祓いをしてもらいました。

○ 盆綱引き(八月十五日(新))

青年は朝から牛頸山や梶原山に藤カズラを採りに行き子どもたちが集めたカヤなどを使って盆綱ナイをします。綱は三ツナイで太いので、昔はお薬師様の大きなエナミの木(エノキ)に片方の端を結びつけて、何人もかかってナイました。

綱引きは青年と子どもの対抗でした。

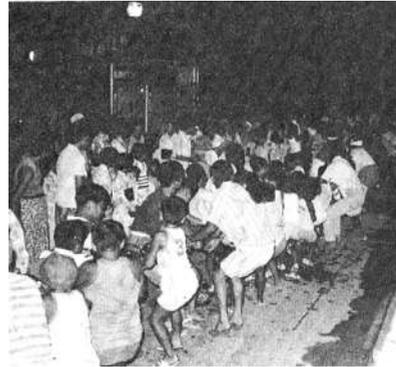
盆綱引きはお墓に戻る先祖の霊を引き止めるためとか地獄に落ちようとする霊を引き上げるためにするものだとかの言い伝えがあります。

○ 芋名月（九月十三日（新））

お薬師様の前に稲のワラの大把（おおわ）を立てます。それに柿を突き刺した竹を立てて、その大把のワラタバの上に琉球芋（サツマ芋）をのせておきます。この芋は子どもたちがヒルカラ（午後）各家をまわって「芋あげちゃんないや（芋をあげてくれませんか）」と言ってもらったものです。日が暮れるのを待って、子どもたちは芋を引き（取り）に行きました。

○ 絵馬あげ（十二月から正月）

年の暮れに子どもが手分けして、各家をまわり絵馬の銭（エンマのゼン）きりをしました。



盆綱引き

子頭（こがしら）が博多の善賢堂まで絵馬を買いに行きました。絵馬の代金をまけてもらったゼン（銭）でお菓子をかうのも楽しみの一つでした。お宮に奉納するのは年が明けてすぐでした。

② 子どもの日常の遊び

子どもは遊ぶことと食べることが何よりの楽しみでしたので子どもの行事をみると、いつもこの二つの要素がはいっています。

さて「小倉」という地名は「小高い所」という意味からきたという説があるくらいで、事実、むかしの小倉は「山の中に畑がある」ような所でした。そのため、灌漑用水には苦勞が多かったのですが、一方、「春日（村）」で一番、山の多い所」という自慢にもなっていました。

春日小学校の前身である須玖小学校の時代（明治六—三十五年）はガメ山（現在の春日東中正門のすぐ北側）が、もってこいの遠足山だったそうです。「ガメ（亀）」



絵馬

の這（ほ）うたごたる」ゆるやかなスロープの山は萩場（まぐさば）で草山だったそうですが、こういう子ども遊べる山が小倉にはあちこちにありました。

○ ウツツメ掛け

小学校四・五年以上になると、秋から冬にかけて、ウツツメ（小鳥を捕るワナ）を掛けたり、メジロおとしをしたりしました。

ウツツメは直径三センチくらいの立木を弓なりに曲げその弾力を応用する仕掛けワナで、一人が五―六カ所に仕掛け、毎日、学校から帰って友だちと見まわりに出かけました。

エサにはモミ、麦、ハジ（ハゼ）の実などを使用しました。カッチユウやヒヨドリがよく掛りました。焚火やクドトコで焼いて食べる味は格別でした。

○ メジロおとし

メジロおとしと、メジロ飼いは野性味あふれる男の子の楽しい遊びでした。

メジロは習性として、春先になると奥山に移動して行きますが、秋から冬の間は里山に来て、一〇羽から五〇羽くらいの群れをつくり、山から山へ一定のコースを毎日同じように移動します。中には群れをはずれて、一羽とか番（つがい）で行動しているものもいます。メスとオス

の区別は鳴き声ひと声聞けば、微妙な音色で識別できます。また経験を積めば、毛色や体形でも雌雄が一目でわかるようになります。

メジロおとしは、まずトリモチ作りから始まります。

トリモチの木は山の雑木の中に極く稀れに混っていて、他の木と見分けるのはなかなか容易なことではありません。たまたまタキモン伐りするとき、おとなが見つかる子どもが山をソウツキマワって（歩きまわって）いるうちに見つけるかするのですが、そのトリモチの木のある所は絶対秘密になっていて、その木はみんなで大切にしました。トリモチは、その木の皮を搗いてつくりま

す。ナタガマやナタで皮を削りとり、ドンゴロスなどに隠して持つて帰ります。他人（ひと）にトリモチの木のありかがバレないようにするためです。皮を一度に削り取ると、木が枯れてしまうので、枯れない程度に皮を残しておく、また二―三年後には新しい皮がでかかります。

削り取ってきたトリモチの樹皮は、そのまま臼で搗いてもいいのですが、二―三日、水につけて、ちよつとズルズルになり、腐った臭いが出だしたころ搗くとできあがりも早く、できるトリモチの量も多いようです。

小学生はそんなに大仕掛けのことはできないので、肥後守（ひごのかみ・折り込み小刀）で、花テボーばいぐ

らしいの皮をはいできます。お宮の石のくぼみに入れ、石で三分ほど搗きます。充分こなれて餅状になると流れ川でよくすすぎます。すると、木皮の繊維質のものが洗い流されて、ゴム状の粘着質のものだけが残りという方法です。

このトリモチにも、出来不出来があり、なかなか思うようにはいきません。餅搗き白一ぱいのトリモチの皮で小蜜柑ぐらいの量のトリモチができますが、気温が高くなると、流れてしまうので、使わないときは化粧用クリームのビンに入れて保存しました。

いよいよメジロおとしです。

メジロおとしには、おとり、トリモチ、小刀かナタガマ、ときにはオトリ籠をさげてトリモチを塗るための実のついているハゼの枝、花のついたツバキの枝、またはツルウメモドキなどを持って行きます。

行き先はヒロヤネ、上の山、大南などでした。

おとりにはメツチョ（メス）を持って行くのが普通です。しかし、オツチョ（オス）を持って行くとメジロの群れの大將がケンカを仕掛けにくるので、極くまれに、よかメジロをおとすこともできます。大低の場合、メスのおとりを目がけてやぶれメジロのオスが寄ってきますが子どもたちが狙っているのは、胸に大きな金スジの流れ

たオスメジロです。そういうメジロは声が良く、すぐに高音をよく張るようになります。

○ メジロ飼

「メジロを飼う」ことを「メジロを置く」といっていました。メジロなど野鳥類は二―三時間も水や餌（えき）をやらないと死んでしまいます。

毎日、すり鉢でスリ餌（え）をつくり、水を与え、天気の良い日には水浴びをさせ、シリガエ（フンの付いた籠の底の新聞紙の取り替え）をします。スリ餌も毛の色艶や鳴き声がよくなるように工夫に工夫を重ねます。

メジロ籠もヘゴかき（ヒゴをけずること）から自分でして、作り上げる器用な少年も少なくありませんでした。

○ 水浴び

早い者は麦刈り前から水浴びをしました。「泳ぐ」と



メジロ籠作り

か「水泳」とかはいりませんでした。小さい子どもは浅くて安全な沖の川やお汐井川の下井手や赤井手で水遊びをするのですが、小学生の上学年になると、溜池に行きました。新池・古新池・地藏(ぞうご)池などでしたが、小池が一番人気がありました。

○ 魚(いお)とり

水浴びと魚とりは切っても切れない遊びでしたが、魚とりの方は秋の水落しごろ、もう一度シーズンがありました。池尻の川、馬入れ川、下井手川はよく魚の獲れた所です。池干しにもぎわいました。ゲール(ゲーリともいう。ナマズの小さいもの)ギユウギユウ(ギユギユともいう)、コイ、ウナギ、ナマズ、フナ、ドンボ、ドジョウ、サワガネ(沢ガニ)タイワンドジョウ、シピンタ、ギシネラミ、キンネンドジョウ、ソーメンドジョウ、ヤンプ、カモツカ、ハヤなどが池や川で獲れました。



小池

獲る道具としては、ウケ、シヨウケ、ツケバリ、ゲラン、ハイトリピン、トアミ、ヤス、ノコ、ホウチヨウ、ヌクメ、ウドサシ、イシパイ、アミなどを使いました。夜の魚獲りをヨボリといました。ほかにスズメ貝(シミ貝)やゴビナを川で獲りました。田んぼで取る「土用の田ニシ」はおいしいものでした。

○ サンギョーシ(竹馬)

幼い子どもから青年までよくやったものです。高等科くらいになると、背たけよりも高い五尺七寸くらいのものを作り、屋根から乗ったりしました。

足のせ竹は支(ささ)えがなく、竹に切りこみを入れて差しこみ、ひもでくくりまます。ひもはシヨロのなわでした。

○ こま(独楽)

ウチカケをしました。相手のこまに、上から自分のこ



魚具のいろいろ

まで打ちかけたり、ケンをひもでひっかけて手にのせたりします。強いこまをつくるためシンをとがらせませす。

ひもは田植綱(シヨ口綱)やワラ縄を使います。一番上等の綱はいちぶ(イチビ)で、こまにあわせて、ちょうどよい太きになったものでした。いちぶほどの家にも一とうねぐらいは作っていました。ほかに店で買えばマオランやダミーがありました。

○ 蹴(け)り馬

ジャイケン(ジャンケン)で負けた者が木や壁を背に親馬となり、胴馬になる者が頭をつけてつながって台をつくりませす。乗り手は駆けてきて次々に飛び乗って胴馬をゆすり、つなぎ目をたち切って馬をこわして逃げていきます。そのとき、胴馬の尻の者が逃げていく乗り手を蹴り、蹴られた者がこんどは馬になり、親があがってきます。

○ パッチ

厚紙に武者絵などを描いた玩具。ジャンケンで負けた方が、パッチを地面や瓦の上に置きます。勝った方が、その側面のすき間をねらって、強く打ちつけてかやす(裏に返す)か、あおぎ出すかするとそのパッチがもらえます。風が入りにくいように四隅を折ったパッチを地面にすいつくように置かれると、かやりにくいので打つ



パッチ

方はパッチを軽く曲げてける(打つ)など双方とも知恵をしぼりました。

○ 蟬とり

長い竹の先に輪をつくり、それに鎮台蜘蛛(くも)のエバ(菓)をひっつけて、このクモの網で蟬を捕ります。この獲物(えもの)はチイゼミ(小さい蟬)でワシゼミ、クマゼミ、油ゼミは手で捕ります。蚊帳(かや)を利用して網を作ることもあります。

○ 螢とり

ハダカ麦の取りこみのころ(六―七月)麦ワラの籠を作って、女竹(おなごだけ)や麦ドオシ、カラシドオシを持って、暗くなるころ螢とりに行きました。

○ 杉の実鉄砲

ちようど杉の実がはいる



夕方の螢とり

くらいの穴のある女竹を一〇センチくらいに切り、さらにその穴にはいるくらいの笹竹を弾(たま)こめ用にします。杉の実(杉の雄花)を弾にします。

○ ヒバリ、スズメの巢荒し

ヒバリは春、麦畑の中に巢をつくって卵を生んでいます。竹ヤネ(竹藪)にはスズメがたくさんいました。

○ 穴打ち

主に青年のした遊び。地べたに横線を引き向こう側に穴をつくります。離れた所から穴めがけて一銭銅貨を投げて穴に近い人から順に穴に向って、こんどは二銭銅貨を打ちます。

○ モツサン

もち粉を小さな粒に固めたものを糸に通したもので赤、青、黄の色がついている女の子の玩具です。それを指に巻いて、ヒトセ巻いたか、フタセ巻いたかアテグツチヨ(あてくらべ)をします。一連ずつ出しあったモツサンを「親」が一本だけ端を結んでおき、先の方は揃えて握って各人に引かせ、



結んだのを引いた者が全部のモツサンをもらえる遊びです。また二本ずつ出して遠くに描(か)いた丸い輪の中に、うまくはみ出さずに入れた者が他のをもらえます。(春日区編頁49参照)

○ ビンコ

土で作った素焼のオハジキを中高くしたような形で、簡単な絵が描いてあります。

遊び方は、オハジキを振って表が向いたらもらえる遊びや穴打ちなどです。



腰踏み・肩叩きは子どものしごと

○ 凧(たこ)あげ

竹ヒゴを作り、それを糸で結んで骨組みをつくり、それに和紙や新聞紙を貼りつけ、一間くらいの足をつけ

ます。たかばた上げといひます。

○ そのほかの遊び

輪まわし、相撲、腕相撲、缶蹴り、石蹴り、天気占い、花一匁、トンボ捕り、虫捕り、柿ぬすみ、木の实ひろい、かくれんぼ、縄とび、下駄かくし、雪ダルマ、雪合戦、陣取り、カルタ、すごろく、鉢巻取り、お手玉、まりつき、摘み草（ツクシ、フツ（ヨモギ）セリ）、笹笛、スモウトリ草。

○ 自然の中の食べもの

子どもたちは一年中、自然の中から食べ物を見つけてきました。

ギシギシ、ズバナ、青梅（塩をつけて食べる）、ヤマモモ、パンゴ（ムカゴ）、ヤマイモ、シイ、ササグリ、ジジバの実、アケビ、ボタガキ、ミソソチヨウ（シヤシャンボ）、仏手紺、ダイダイ、夏ミカン、金紺、ミカン、イチジク、桜ンボ、ムク、山イチゴ、マキの実、キイチゴ、ニッケイ、ツバキの花の蜜、蜂の腹にはいつている蜜。イナゴも食べましたが、ヤナギ虫は今から考えるところよつとグロテスクです。

春先、川辺に行くときネコヤナギはもう白い三センチほどの花の穂（「いんこうこう」という）を出しています。このネコヤナギの木の中に、根元がふくらんで、虫食いと

一目でわかるものがあります。

二―三センチのヤナギ虫の中にはいつています。小型のイモ虫のようで真っ白です。焼いてメジロのスリ餌に入ると、メジロの声が良くなり、よく鳴くようになります。

人が食べるときは、火にあぶってそのまま丸ごと口の中に入れます。香ばしくて精がつくといわれ、子どもは虫下しになるといつて無理に食べさせられることもありました。

(2) 青年団

① 伝統と組織

この近辺ではめずらしく、小倉区と春日区には藩政時代からあったと思われる「若者組」の遺風が最近まで見られました。

次の表は「筑紫の歴史とくらし」（白水昇著）を参考にしています。が、「前髪ぞう」や「元老」はいまでも古老の口からよく飛び出すことばです。

小倉（村）の年齢集団

元老(役職 経験者)	年長組	中(ちゅう) う)どこ または 中年	前髪ぞう	序 列
～31	30～26 既婚者	25～19	18～16	年 齢
もめごとの仲裁、相談。 (水利問題など)	親睦、左義長などの監督	行事の主催、親睦、水番、夜 警、救急、火事、水害の救助。 年長者から青年団の支部長を 出す。	最近では一年目はボサ方と呼 ばれた。 下働き、走り使い、見習い、 夜学、親睦。	活 動 と 役 割

大正十一年に春日村青年団が発足し小倉支部はその時できました。支部の寄り(会合)は集会所(公会堂と呼んだこともある)で開かれました。

② 青年団活動

おもな行事としては、剣道、銃剣術、相撲、陸上競技等の村大会と郡大会がありました。そういう行事をするための資金づくりも青年団活動では重要なものでした。資金づくりとしては、例えば、次のようなものがありました。

- 小池での養鯉
- 殺虫灯とぼし
- 雑餉限停車場での看板の入れ替え
- 活動写真の上映
- 芝居の興行
- 青年芝居

③ 青年たちの日常

親睦
昭和にはいるころから、青年団内部での年齢による呼称としては、入団初年度の「ボサ方」だけになりましたが、支部長以下、年齢ごとの階級意識は根強く残っていました。

ボサ方が上の者の走り使いをしたり、親睦の時にめし炊きをしたり案内役をしたりするのは、むかしのままでした。

つね日ごろ青年たちのほとんどが農業に従事してしましたので、昼間の百姓仕事は大変な重労働で、朝からのよこい（休み）は雨降り以外にはめつたにありませんでした。

雨降りでも、ひと所に寄つて繩をなうなどワラ仕事をよくしました。

しかし、今のようになんかあるわけでもなく、また現金もあまり持っていないのが普通でしたので、夜になると何もすることはありませんでした。

雨の日など、手っ取り早く楽しめるのは親睦でした。一日中雨があがらないとみると、幹部が急に「きょうするぞ」と言い出すことがあるので、ボサ方連中はギンダラマイすることがたびたびでした。

親睦は普通は月に一度（農作業のひまなときには二度のこともあった）宿まわしですることになっていました。米は食事一度分が四合ときまっていますから、朝からするときは「一升二合切り」をしました。里芋めし、ニワトリめしを炊き、朝から食べずにいて、四杯も五杯も食べました。

一番よく食べるのは麦刈り前の「地獄さかえ（または地獄さかし）」の時で、一年中で最も日が長く、農作業で最も体力を消耗する時期にあたります。

三回のめしのほかに三時か四時ごろぜんざいも食べました。

○ 夜学・一人前

明治の末から大正の初めごろにかけては兵隊検査前の青年は夜学所（公会堂・のちの集会所）で読み・書き・ソロバンを習いました。小学校の先生であつた成吉権太郎先生が教えるに來られました。

勉強ごともさることながら、二十歳（はたち）になると兵隊検査もあるし、なによりも百姓仕事があるので、体力があつて力仕事ができることが一人前としての必須の条件でした。男の一人前の仕事量はだいたいきまつていました。

例えば、草切り（草刈りとは言わない）はアサノマ（朝の間・午前中）に三荷（ソガリ棒で肩の前後に二把が一荷）。ハナワ（小繩）ないはヒシテ（一日中）で一とつぐりという具合です。力は米一俵（五六キロまたは六〇キロ）がカタゲられる（担がれる）と一人前でした。集会所の前のお薬師様のところに一〇〇斤（約六〇キロ）ばかりの力石がありました。

集会所に集まつた時によくこの力石の持ち上げグッチヨ（競争）をしました。力のある者は十五歳で差しました。

○ 男女交際

今の若者の趣味はバラエティに富み、お金の方も派手に使う者も少なくありませんが、大正から昭和初期の農村では、ナニヤ節のまねをしたり流行歌（はやりうた）を歌うぐらいが普通で、それ以上のぼせると道楽といつてきられるほどでした。

遊びにはお金をかける青年はほとんどありませんでした。また、男女の深い交際はもちろん、今日のデート程度の交際も世間の目が許しませんでした。仮りに、特定の人と恋仲になったといううわさが立つと「あの人たちや、ててくりようとななる」と言われて、まわりから特別の目で見られ、爪弾（つまはじ）きされました。

それでも恋愛が成就すれば、なんとなく陰口もおさまってしまうのですが、一旦、破談にでもなると、女性の方はキズモンということになってしまいます。

この点、男の方の遊びはだいたい大目に見られたようです。たとえば農繁期に泊りこみで働きにくるオナゴシとの交際なども大らかなものでした。小倉には志賀島の弘（ひろ）や奈多から来る人たちが一番多く、給金は「六日で一俵」か「八日で一俵」が相場で、稲刈りのときは、早モン（早稲）からオソモン（晩稲）まで二―三週間、それぞれ、庸われた家に泊っていました。農繁期の間、

このオナゴシの娘さんたちとは割合、自由に交際ができました。

今では死語になったマクラゴメということばがあったことを付け加えておきましょう。

さて、村内（むらうち）の娘さんの縁談がととのうとその家から青年団に酒五升と肴が届けられるしきたりになっていました。

「よくぞ、これまで、うちの娘をよその青年から守つて下さいました」というお札の意味がこめられていたのだそうです。

○ 小遣い銭

青年たちは夜になると、よく集会所に寄ってきました。ときには水の番や池の鯉泥棒の見廻りもありましたがふだんは何もすることはありませんでした。そこで、話はず、食い物のことになります。年下の者がヨーカンを買いに走らされます。揚ゲカマボコを食うこともありました。ちよつと悪ルソウの青年になると、畑からスイカを抱えて戻ってくる者もいました。犬を食べた話も多いのですが、犬は赤犬が身がやわらかく、一番うまいとされていました。猫を食った豪傑（ごうけつ）の話もあります。

青年が個人で買ったものはもちろん、青年団として買

った酒やかマボコ、フ(ふ)などの代金は盆前と正月前
とに、まとめて支払いました。青年団として支払う場合、
会計が赤字になることがありましたが、その時は臨時に
アタマワリで個人から足りない分だけ切りました。

こういうお金は青年が自分の家からこっそり、モミヤ
玄米を持出して作りました。これをマスボリといいまし
た。

○ 英彦山参りと娘札打ち

青年男女が必ずしなければならぬものに、男の英彦
山参りと、女の娘札打ちがありました。

英彦山参りは二泊三日が普通で、道順は、雑餉隈停車
場―二日市―(甘木線)―甘木―小石原(ここでニギリ
メシを食う)―上秋月―江川越し―英彦山(一泊)―丸
山公園(一泊)―雑餉隈(境(さか)迎え)―お薬師様
前(解散)

が多かったようです。

十人前後の血気盛んな青年たちの団体ですから、宿で
の酒盛りは豪快でけんかもよくしました。

雑餉隈で境迎え(さかむかえ)がありました。これは
長旅の無事を喜んで村の代表が村境(むらざかい)まで
迎えに行く昔からの習俗です。坂迎え・酒迎えとも書き
ますが、多くは酒宴を張るので「酒迎え」の意味に受け

とられていたようです。

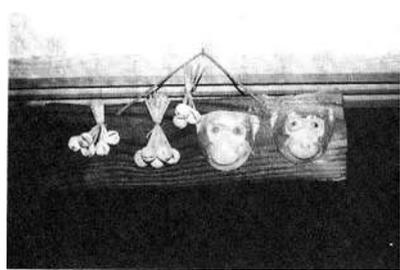
雑餉隈での境迎えの酒代は泊り宿で「タンゼントリ」
をしてきた、その丹前で済せることになっていました。

ここで、顔に化粧を塗り、前垂れなどをかけて仮装し
お薬師様まで大にぎわいで帰ってきました。出迎えた人
たちに駄菓子を配りました。

大正の初めごろまでは履物はワラジでしたが、昭和に
はいると地下タビで行くようになりました。

地下タビについては、こんな話があります。

大正の終りに青年二十五人が篠栗(ささぐり)参りを
したところ、そのうち地下タビを履いてきた者は「たっ



英彦山ガラガラ

たの三人しかほかおらじやった」ということです。大変高価なものだったのです。この三人は途中、何度も地下タビの裏を見ては「まあだ減らん。まあだ減らん」と自慢するやら、不思議がるやらだったそうです。「信仰」の「英彦山参りと伊勢参り」の項参照)

娘打ちのことは「お国札」とか「郡中札」という方が多かったです。

娘さん十数人が年配の男の人の引率で、旧那珂郡の村々に祀られている三三カ所のお観音様を二―三日泊りで巡拝するものです。

今の那珂川町の山田とか中原のお観音様を順番にまわりました。マンジュウ笠をかぶり、着物を短かくして、赤い腰巻きを出して、ワラゾウ履きでした。

上の山のお観音様は二十四番札所でした。

○ 参宮同行 (さんぐうどうぎょう)

これは青年とは限らず、もつと年配でもいいのですが信仰と関連してここに付け加えます。

お伊勢参りともいわれる参宮は三月に出発し、一と月くらいかかって帰ってきました。現金収入の少なかった当時は、参宮講という「講盛り(こうもり)」をしました。この一行は終生特別の親交をもち、のちのちまで毎年親睦をしたということです。参宮記念に絵馬、写真、

狛犬(こまいぬ)などを
お宮に奉納しました。

白水義雄さん一行は大
正十三年に参宮し、十五
年に狛犬を住吉神社に奉
献しました。

伊勢まで行けない人は
「参宮でけんもんな英彦
山ぐらい行かじや」とい
って英彦山参りをしまし
た。英彦山に参ると、伊
勢に半分行った効験があ
るとされ、半参宮といいま
す。英彦山には伊勢遥拝
所があります。

(「信仰」の「英彦山参りと伊勢参宮」参照)

家族構成

1 家族の呼称

最近はその時代の流れとともに方言が消えつつあります。



狛犬と白水義雄さん

最も身近かな身内の者に対する呼び方も変わってきています。むかしは次のように呼びました。

曾祖父 ヒイジイサン ヒイジイチャン (チツカジイ
チャン)

曾祖母 ヒイババサン ヒイバアチャン (チツカバア
チャン)

祖父 ジイサン ジイチャン (オツカジイチャン)
祖母 ババサン バアチャン (オツカバアチャン)

父 トトサン トーチャン オトツチャン
母 カカサン カーチャン オツカシヤン

兄 アンチャン アンシヤン
姉 アネサン (甘つたれた言いかたでアネシヤン)

弟妹 名前を呼ぶ。

2 相続

アトトリは長男が原則で単独で家督を相続します。しかし女ばかりのとき、長女と弟との年齢の差があるときは、長女に婿養子をもたらって相続させます。相続の時期は親(戸主)が死亡した後になります。

3 所帯ゆずり

主婦権の委譲を所帯ユズリといい、「あっち(あの家)は、ゆずんなったげな」という言葉で部落内にそのことが伝えられます。

時期は家によって異なりますが、大体「隠居」したとき、孫ができたときが多く、姑が強い家では、多少遅れることもあったようです。

4 隠居

隠居には別棟の隠居家に住む隠居と家族一緒に二つ屋根の下に住む隠居とがあります。隠居する時期は、子どもが一人前(四十歳くらい)になったときで、大体六十歳前後です。

その際、財産は原則として分与しません。

5 分家

本家をホンヤ、分家をシンタクといい、弟が嫁をもらって分家します。その際、財産の分与を受けます。その額は家によって異なりますが、村内に家(ワカレヤ)を建ててやる程度です。

6 同族集団

本家、分家、嫁、養子に行つた者の集団をイチゾクとかイトトウといひます。

正月、彼岸、盆、法事、冠婚葬祭その他のときにつきあいますが、本家が「リーダーシップ」をとることが多いようです。

7 植家

小倉部落は長円寺（春日）、無量寺（須玖）慶伝寺（大野城市山田）、法善寺（弥永）、専光寺（谷口）のいづれかの門徒でした。

住居

1 屋敷

農家は田畑で行う作業以外の仕事は、すべて屋敷内で行うので敷地は適当な広さと、日あたりがよく、水はけのよいことが条件です。その点、小倉地区はなだらかな丘陵地帯に集落があり、敷地としては好条件です。

敷地の広さは耕地の広狭によつてちがいますが、小は十二—十三坪から大は四百坪ほどで居屋（おりや）の建

坪としては二十五坪から四十坪ほどまでありました。

屋敷の中には、家族の居住する母屋（または居屋）のほかにも農作業に必要な種々の建物があつます。

牛（馬）小屋、鶏小屋、タキモン小屋、タイ肥小屋、便所などがそれぞれです。

2 垣根と庭木

いけがきは女竹や土壁がありますが、土壁が多かつたようです。土壁は荒石の上に赤土で作り、仕上げにはシツクイなどは使ひませんが、仕上げの程度はよかつたようです。



土蔵とイナヤ

その点、牛小屋や堆肥小屋は仕上げが荒かつたので蜂が穴をあけ巣造りをしていました。しかし、そういう壁も次第に取りくずされ、現在ブロック壁にとつて変りつつあります。

屋敷内の樹木には果樹として柿、グミなどが多くて子どものもとりものとして植えてあります。そのほか観

賞用の樹木もあります。

一方、屋敷内に植えることを忌んだものもあります。

○藤は巻き倒す。

○ヒワ（枇把）は人のうめき声でふとる。

○シヨロはバラバラになるので家もバラバラになる。

○椿は花が首から落ちる。

といつて植えません。南天は便所のところに植えるものとされており、夢見がわるかつたら、朝、南天を見てまじないをとなえると消えるといういつたえがあります。そのほか薬用にも利用しました。

薬用といえどクダミ草があり、できものの吸い出しに使います。また、ムクの木はねばりがあるので舟やかぶとの材料になるといわれています。

植えるところは、北か西側に限られ南側には植えませんが、南に植えるとかド（庭）や母屋の日あたりが悪くなるからです。

3 建築のはじめに

母屋、つまり家族の居住する建物は必ず南向きにします。その前面に十分なカド（前庭）をとることは農作業の必要性からきまつた形式です。建てるのは三隣亡（サンリンボウ）の日は火事を起すといつて避けます。

また、農繁期を避けるのは当然ですが、冬は寒が強いとシツクイが浮いて仕上げが悪くなるので避けます。竹は赤土壁の中に骨組みとして組みこみますが「木六竹八」といい、木は旧暦六月、竹は八月に切るものとされています。建築期間は現在では三カ月くらいですが、このころは大体一カ年くらいかかりました。

建築資金は大部分は手持ち現金ですが、不足分は田畑を抵当にいれて借金することもありました。

当時は三十五坪―四十坪建てで坪当り三〇〇円くらいでしたから四十坪の家で千二百円くらいで建つ計算になります。昭和九年ころ当時の熟練工で日当一円から一円二十銭のころの話です。

4 地鎮祭

いよいよ建てる段になると地鎮祭（方よけ）を行うのですが、荒神ボンサン（座頭ともいう）を呼びシメナワを張り、塩、米、酒などを供えてお祓いをします。

棟梁は呼ばず、家族でうちうちでやります。そのとき荒神ボンサンは琵琶はひきません。ボンサンに対する謝礼は米三升三合ときめられていました。門付けのときは米三合でした。

5 造作のまえに

家を建てることかきまると、親類が相談し、山から木を伐つてくることから始まります。

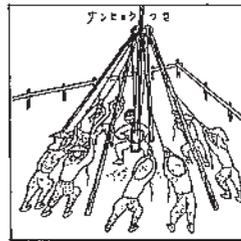
小倉の人はほとんどが山持ちで、話者・白水宗規さんの家では一町二反(一一、九〇一平方メートル)一一九ヘクタール)あったそうです。立ち木は主に松と杉でした。木樵(山林の材木を伐る人)が持ち山に入り伐木を現場に持ちこみ、柱、梁などと分けて、おおよっぱに木ドリをします。そしてこれを乾燥させますが、枝や葉をつけたまま枯らすほうが枯れるのが早いようです。

6 建て方

建物の基礎は今日のようにコンクリートで基礎囲いをするのではなく、敷石を置き、その上に柱を立てます。そのため地搗きをします。その順序は大黒柱を立てるところからで、順次、他の柱の場所へ移動し、最後の搗き止めは大黒柱のところです。

地搗きは近所の人の加勢を要します。遠い親戚より近い他人がたよりになり、専門職以外は総べてこの人たちの手を借りてしました。

大黒柱はケヤキが多く、大体七!八寸角で普通の柱は四寸角くらいです。



サンヒヨウつき

大工は現場に乗りこむと小屋を建ててそこに寝泊りします。これを小屋入りといいます。

三度三度の食事は、建て主の奥さんが米のゴハンと味噌漬や卵の吸い物を出しました。それ以外に十時と三時にはお茶の子といつてオヤツを出しました。

7 建て主と棟梁との関係

建て主と棟梁との関係は、ほとんど常雇契約で日当は一円くらいで、十日ごとか月一回の支払いでした。当時としては、大工は相当な日給取りで、毎日晩酌もつきました。また、親戚からも時々、大工見舞いといつてご馳走のさし入れもありました。当時この地区に大工は四人ほどいましたが、昭和五十八年には二人に減少しています。

8 棟上げ

棟上げは必ず吉日を選び、朝から準備を始めますが、大きな家は前日からかかりました。

接待するのは、棟梁、大工、地搦きを加勢した人々で餅撒きは東方から始め西、南、北の順に行います。棟上げ餅は紅白の餅で、多いときは一俵も搦きます。

棟上げがすむと、祝いの行事が行われます。棟の中央に「屋飾り」をします。男竹を立て、その上部に日の丸を画いた扇を結びつけ扇の下部から紅白の木綿布を下げます。また棟に「射り上り」「射り下り」二組の竹製の弓矢を作つて取りつけます。

棟上げがすんでから屋根ごしらえします。祝いのあと酔いつぶれた棟梁さんと米一俵を車力かりヤカーに乗せ自宅まで送りつけました。

9 屋根

ほとんどが麦ワラ屋根（広島屋根）で、材料はカヤと小麦ワラですが、近くではカヤが少なく、下地に少し敷いて表面を麦ワラで葺きます。カヤは三十年くらい、麦ワラは八年くらいもてますが、大体三年に一回くらいの割合で葺き替えました。これをクサ屋根といえます。

軒まわりは瓦葺きかトタン葺きです。

この屋根葺きにも近隣の人たちの加勢が必要です。建築のときだけでなく、祝事、葬儀、田植えなどの相互扶助は、地域の生活で欠くことのできない義理でもありました。

10 新築祝い

新築祝いは建て上つて半年か一年後に行いました。そのときは鳴り物といって、田舎淨瑠璃（いなかじょーろり）か浪花節を入れて、祝いの膳が出てにぎやかでした。

料理はガメ煮、ヌタエ、煮付け、オスマシなどでニワトリが主体でした。

帰りには手みやげとしてシユンカン（かまぼこの詰め合せ）や紅白の餅（餅撒きのものよりもちよつと大きめのもの）を客に持たせました。接待客は棟上げのときの人々と、屋根瓦屋などでした。

11 ヤウツリ（引越し）

新築の家へ引越しするときにヤガユスリといって、小豆を三粒入れた粥をつくつて食べますが、そのとき小豆が一粒でも碗の中に入っていた人は「フがよか」といいその次に家を建てることができると言つたものです。

「フがよか」とは運がいいとか、めぐりあわせがいいという意味です。

12 クド

屋内のニワ（土間）にはクドを築きます。

普通三つあって一番大きなものは三升—四升のなべをかけ、大量の煮物用として用いました。これをオオクドといえます。

クドは赤土と、ねばりのある田の土とを用い、スサ（きりわら）を混ぜ合せて築（つ）きました。

13 炉

イロリは普通ありませんでしたが、養蚕をする農家では、カイコ部屋に畳一枚分くらいのイロリが切っていました。二つある家もあり、カイコはカイゴさまと呼ばれて大切に扱われていました。

14 ニワ（土間）

ニワはそのままの土では濡れるとべちゃべちゃに汚れる



炊事場

るので、それを防ぐため、ギチ打ちといって塩、石灰、赤土を混ぜ合せて、ニワに塗りつけます。これが乾くと固くかたまります。

15 風呂場

風呂場をユドノといい、風呂（桶）は五右衛門風呂か木製の小判型の浴槽を据付けていましたが、木製のものが多かったようです。

五右衛門風呂は足が直接底にあたらぬように、中になべ蓋のような板（すいた）を入れておきました。風呂の水汲みは子どもの役目でした。

燃料は五右衛門風呂の方は小枝か柴ですが、木製の方は石炭粉を水で固めた握り飯の三倍ほどの大きさのタドンです。この石炭粉は志免の亀山炭坑から買ってきて、タドンは自家製でした。

16 便所

ほとんどの家が便所は居家（おりや）の中にはなく、別棟になっており、雨のとき、夜中などは不便で、ことに老人にとつては体にこたえたことでしょう。

別図、西村營（たかし）さん宅に外便所とあるのは小便専用でシヨウペンタゴといい、かめが埋めてあり、三

方を囲んでいるだけの造りです。

なお、白水宗規さんの話では、子どもの頃、ショウベ
ンタゴの内側に付着している石灰質のようなものを商売
人が買いに来て、目薬の原料にしたそうです。

17 照明

大正三年に初めて電灯がつけましたが、当時は定額式
(毎月きまった一定の電気料)で、一居間あたり一灯し
かつけませんでした。

そこでランプを併用したり、コードを延ばして明りを
移動させて使用しました。

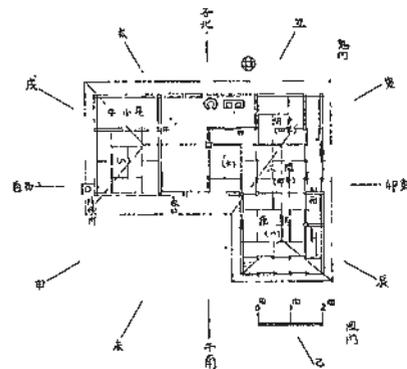
メーター方式になったのは戦後しばらくしてからです。

18 採暖

ユタンポ(ブリキ製や陶器製のもの)の中に熱湯をい
れ、ふとんの中に入れて暖くしました。また、火鉢の中
で消炭(けしずみ)をつけるとか小枝を燃やすとかしま
した。

19 居間の間取り

旧筑紫郡一帯の農家は一般に「鍵屋造り」でした。別
図の通り、座敷と他の部屋との形がカギ型になっている



西村馨さん宅

のでそう呼びます。別図の家は調査後すぐ建て替えの
ためこわされ、写真撮影のひまがありませんでしたが、
当代(西村誉(たかし)さん)で六代目ということでは
たから、多分、江戸末期か明治初期ころのものと思われま
す。

屋根は一般にワラ葺きで、様式は広島屋根でした。

20 借家

借家は一軒もありませんでしたが、城田正兵衛さんが
昭和十六年ごろ建てたのが最初です。

服 飾

1 仕事着

男の農作業の仕事着は夏はテクリ（春日区編頁18写真参照）、六尺ベコ、股引をはき、手には手甲、足にはゾーリかワラジかアシナカ（春日区編頁19写真参照）をはきました。

顔にはテノゴイ（手拭）で頬かぶりをしたり、頭には竹の皮のトンゴ笠をかぶったりします。

冬はドンザかポンチン（綿入れの袖なし。チョッキのようなもの）を着て、足には各家で作った足袋の古いものをはきました。

雨具としてワラ製の毛ミノを着用します。

女の仕事着は縞（しま）のテクリ（春日区編頁19写真参照）でした。これは各家で織ったものです。冬はテクリの上にヒョウヒョウ（黒色、筒袖で裏地のついたもの）を着て、下にはイマキ（腰巻）、手には手申、足にはキヤハンを巻きつけ、アシナカをはき、顔にはテノゴイをかぶり、さらにトンゴ笠をかぶります。

女は晴雨兼用の折りミノを着用します。足袋は普通ばきのもので、足袋型によって各家で作ります。

地下足袋（じかたび）という便利なはき心地のいい足袋ができたのは昭和になってからです。

2 衣類の修理

むかしは何事も節約第一でしたから、着物、蒲団、足袋などは、できるだけふせて（つくろって）使っていたので、ふせだらけで蒲団などはごつごつしていて温いものではありませんでした。衣類のふせをするのも、洗濯をするのも全部夜の仕事でしたから、女は夜遅くまで休むひまはありませんでした。

3 機（はた）

カスリの着物は自分の家で機で織っていましたが、機はいわゆる高機（たかばた）でした。

4 髪型

タカワブツケという髪型が流行（はや）りました。日本髪のことですからピンツケ、水引き、モトイ（元結い）で結（ゆ）います。男の子の髪ツミ（散髪）には家

でカミツミで一枚ツミにしてくれましたが、よーと切れず、引つかかって痛かったそうです。

5 下駄

下駄は普段ばきと他所(よそ)行きとありました。大正七、八年ころまでは夏はゾーリばきで、下駄は他所行き用でした。正月には嫁は里方に干しイワシと下駄一足(両親があれば双方に)を贈りました。

6 コーヤ(紺屋)

染め物はコーヤさんにたのみました。これは下白水、白木原にありました。

食 習

1 平常の食事

夏は日が長く、ことに田がえしや田植えのときなどは食事の回数は四回でした。

(1) 朝ゴハン 六―七時ごろ

カンツキナベでゴハンを炊いて、前の晩の残りの味噌

汁や漬物、梅干などをゴサイにして食べて田畑に出かけました。

(2) 昼ゴハン 十一―十一時半ごろ

平常は漬物などで、ときどき塩クジラ、塩魚干魚を食べました。家に留守番のババサンがおれば、野菜を煮て作ったものを食べました。

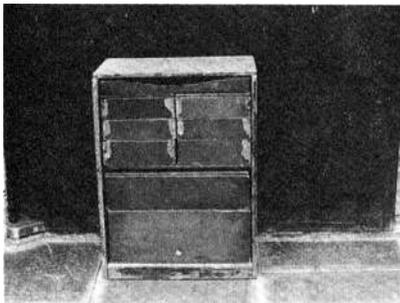
(3) 才茶ノコ 三時半―

四時ごろ

昼のゴハンの残りか、ダゴ汁やソーメンを食べます。田畑が遠い場合には行李のワリコ(弁当箱)かニギリメシを竹の皮に包んで持って行きます。副食物は漬物や梅干です。

(4) 晩ゴハン 八時ごろ

家に留守番のババサンがいらない家では女は一足先に帰って食事の仕度をしたり、風呂をわかしたりしなければ



ワリコ

なりません。

カンツキナベでメシを炊きますが、晩には粟メシ(米七分に粟三分)を炊くこともあります。冬は日が短いので食事は三回で

○朝ゴハン 七時ごろ。味噌汁をつくります。

○昼ゴハン 十二時ごろ

○晩ゴハン 六―七時ごろ

(5) 平常のゴハンは米七分、麦三分で、麦はシャギ麦でした。

一日の食事は五人家族で二升くらいでしたから一人が三合は十分食べています。

また、どうかして飯や醤油が足らなくなったときには隣り近所で貸し借りすることは別段恥かしいことではありませんでした。

お客のあるときは、すしやニワトリメシを炊きました。

お節句につくるニワトリずしは大変おいしいものでした。芋ゴハンは里芋を入れたり、琉球芋を入れたりして炊きます。雑炊はダシを作つて、ゴハンを入れ、餅のあるときには餅も入れます。

(6) 副食物の野菜はもちろん自分の家で作ったもの(里

芋、ゴボウ、大根、フキ、ネギ)をオ煮シメにします。魚は売りにきたのを四―五日おきくらいに買いました。塩モン(塩魚)は志賀島の弘から売りに来ました。そのほかイリコ、干エビ、ワカメ、コブなども売りに来ました。これらは皆、米と引換えました。できるだけ現金支出を少くするためです。

(7) 焼酎は夏、カメで買い三、四軒で分けました。酒はお祝いのときか、オコモリのときには飲みますが、平常は晩酌といったものはしません。

(8) タバコは普通、刻ミタバコです。

2 晴れの食事

(1) 餅

○正月餅 暮れの二十八日に早朝二―三時に起きて一俵から一俵半くらい搗きます(一臼は一升五合―二升)。

二十九日は昔(く)に通じるので忌みます。

水餅にもします（カメの水は時々取りかえなければなりません）

水餅（トリモンにします）

餅米のトギ汁は風呂に入れて使い、風呂の水はあとで肥料にしました。

○ウシドンサマ 春二月と秋十一月（刈りアゲがすん

でから）の丑の日に餅を搗きます。ニワ（家の中

の土間）のお荒神サ

マ（かまど）の前に

臼を台にして手箕（

テミイ）を置き、一

升枡をのせ餅を八合

目ほど入れて供え、

春は梅の芽枝の伸び

たものを花立にさし

て供えました。

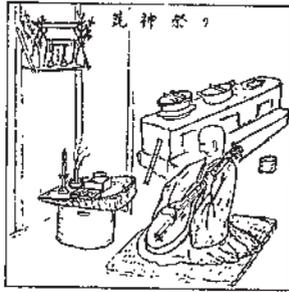
○亥（い）ノコ餅 十一

月の初亥の日に搗い

て、ウシドンサマと

同じように供えました。

○春・秋の彼岸 彼岸餅を搗き、近所や親戚に配りま
す。色餅（紅）も搗きます。アン餅もつくりまし



荒神祭り

た。

○節句餅 四月（新暦）三日に青（フツ餅・よもぎ餅）

紅（食ベニを入れる）、白の三色の菱餅をつくり
ます。菱餅の切りくずはアラレにします。

○オテツギ餅 婚礼の祝言のお膳には必ず鯛とオテツ
ギ餅とをつけます。

「嫁ゴが落着（おてつ）くように」との意味である
とされています。花嫁にはこれを切って食べさせ
ます。なお花嫁のお膳のご飯の食べ残しは花婿が
食べるものとされています。

(2) ダゴ（団子）

○サナボリ（田植え終了の祝い）

ガメシバダゴをつくります。餅を搗く家もありま
した。

○五月の節句 竹の葉に包んだチマキやガメシバダゴ
をつくります。

○盆の十三日の晩にガメシバダゴをつくります。

○八月十五日 芋名月にダゴをつくり、琉球芋をお月
様に供えます。

3 味噌

九月十月に各家で一年分を搗きます。ハダカ麦一升に大豆五合、塩一合（夏越しのものには少し多めに二合くらゐ）の割合いです。コウジの素（もと）を買ってきて二三日かかってコウジをねかせます。

ハナがよくつくようにと主婦はろくに寝ずにコウジの温度に気を配りました。醤油も自家製です。

4 漬ケモン

(1) 味噌漬ケ

タクワンを二三日塩出しして味噌に漬けます。ナスピヤやコブも漬けました。

(2) タクワン

センノジ（四斗樽）に大根を漬けます。また白菜、タカナも漬けました。

(3) 床漬け

ヌカ漬ケというのは昔はありませんでした。

5 保存食

(1) 梅干・ランキョウ

(2) フナ

秋に水落しの池のフナを焼いてホテ（麦ワラを束ね

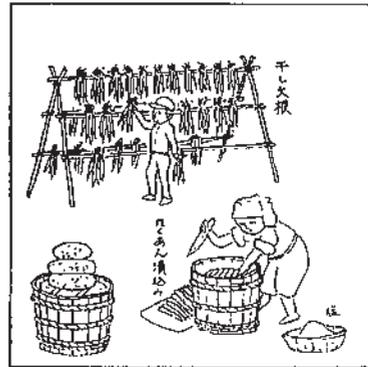
たもの）に串で刺して、天日に乾かしておいてダシに使います。

(3) ゲーリ（ナマズの小さいもの）やドンボなどを焼いて乾かしました。

カンコロ 冬、大根を輪切りにして乾かしたものです。

(4) セン切り 大根をタン

ザク型に切つて乾かしたものです。



漬ケモンつけ



ホテ

6 ドジョウ汁

夏や秋のお祭りのときドジョウを丸のまま味噌汁に入れます。これはご馳走で、翌日食べると一層おいしいものでした。

7 スズメ貝（シジミ貝）

味噌汁に入れて食べると黄痘（おうだん）によく利くといえます。

8 食器

(1) 箱膳

家族めいめいに木製の、方形で蓋付きの箱膳があり、茶碗、皿、箸など入れておき、食事のときは蓋を起して使用します。

(2) エグリ

飯がさめないように飯ピツを入れるワラ製の保温器です。自家製でした。

(3) 手ズケジョウケ

竹製の蓋があり柄がついていました。夏はこれに飯を入れ、風通しのいい所に吊したり、井戸の中に吊したりしました。

(4) 大釜

ニワ（土間）のお荒神サマの前のクドにかけてあります。三升―五升の飯が炊けます。

(5) カンツキ

カンツキ鍋は浅く広い鉄製の鍋で飯は三升くらい炊けます。（春日区編頁25写真参照）

(6) 皿の代用

塩クジラ、イワシを食べるとき油気が多くて汚れるので、柿の葉を皿の代用にしました。

9 米搗き

米は一俵を一度にカラ臼で搗きました。足搗きでした。女の夜の仕事になっていました。青年が遊びに来て搗くのを加勢することもあって、青年の楽しみの一つであったようです。

なお、昇町に水車がありました。ここで米を搗いてもらえば銭（ぜん）を出さなければなりませんので、なるべく自分の家で搗きました。

10 挽き臼（石臼）

大豆を挽（ひ）いて黄粉（きなこ）をつくるとき、性に挽くと粗（あら）くできたものでした。

鶏は各戸に二十羽前後は飼っており、屋敷内に放し飼いで、主にババサンが世話していました。一箇三錢くらいで売り、ババサンの現金収入でした。自分の家で卵を食べることはめったにありませんでした。

12 トリモン（子どものおやつ）

ほとんどが家庭でつくったものでした。

○大豆やトウノ豆を煎つたり、ウズラ豆を煮たりしました。

○節句の菱餅の切れ端を切つて、アラレにします。

○残りご飯やメシビツについたご飯粒を洗つて天日に

干して乾飯（ホシイ）にし、煎つて砂糖をかけます。

○ヤッコメ（焼き米）は種粳（たねもみ）の余りを臼で搗いて煎つて食べます。香ばしくて大変おいしいものです。

○晴れの日につくるダゴやふかし芋、スルメ、メザシ

コブ、イリコなどもトリモンにしました。

○遠足のときのおやつは、アラレを煎つて砂糖をまぶして持つて行きました。

農 作 業

1 田 畑

小倉地区の大部分は丘陵地帯で、平坦な土地は現在の 大和町・宝町一帯だけで、田畑の多くは丘陵の中に複雑に入りこんだ谷間にあります。畑の大きさをいう「大ゼマチ」「小ゼマチ」も他の集落にくらべて小さく「大ゼマチ」といっても、せいぜい一反（一〇アール）程度です。

谷間のタンボ（田）のことを小倉では「浦田」といいますが、北部九州一帯の丘陵地帯には「浦田」と呼ばれる地名が多く、これは古代の沼沢地を水田にしたところと考えられます。

また、このような田には、昔は赤米（あかごめ）をつくっていたのではないかという説もありますが、確証できません。

「浦田」は排水がわるく、冬作のできない田が多くありました。排水のよい田の三分の二はカラシ（菜種）、三分の一は小麦とハダカ麦をつくっています。畑は約二〇ヘクタールほどあり、自家用のイモ、ソバ、アワ、ダイズ、ダイコ（大根）などをつくりました。

2 水利

小倉は丘陵地であるため河川はなく、灌漑用水の大部分は溜池と天水（湧き水、降水）に依存しています。

溜池の数は多く、大牟田池を筆頭に、小倉新池（古新池）、小池、雪ヶ浦池、地蔵子池、原田新池、立石池、ドンポー池、柚ノ木池、草野池、石橋池、浮牟田池などその他の無名の小さな池を合せると約二〇カ所もあります。

(1) 大牟田池（五ヶ村池）の水利慣行

大牟田池の水利権は、水量の二分の一を那珂（福岡市博多区）、四分の一を小倉、残りの四分一を麦野、板付諸岡（以上博多区）と須玖がもっています。溜池直下（現公団レイク・ハウスから紅葉ヶ丘公民館付近）は、春日地区の人が耕作していますが、この耕地の取水は溜池が春日地区内にあるので特権として認められています。小倉地区から春日地区に支払う池床米（いけとこまい、敷地料）は米一斗二升五合（一八・七五キログラム）で、毎年春日地区に持参しましたが下流地区は春日地区を経由せずに水源のある牛頭（大野城市）に持参したようです。

小倉新池、立石池の敷地も春日地区内にありますが、

こちらは池床米の支払いはありません。

大牟田池の管理は小倉に委任されているので、下流地区が灌漑用水を必要とするときは、各地区の諒解をとり、時間を定めて通水します。この場合は分水堰に監視人を立てて、水番をするので下流地区から来る水番の人夫賃など馬鹿にならなかつたようです。また、大牟田池の貯水は、牛頭（大野城市）から三つの溜池、四つのトンネルを経由して運ばれますが、最後の惣利池は春日地区の管理であるため、春の彼岸から秋の彼岸の十日前までの通水期間に、水量が不足している年には、大正時代までたびたび紛争があつたといわれています。

(2) その他の水利慣行

溜池からの灌漑は、すべて区長の指示で行い、溜池の水量観測や井樋（いび）の栓（せん）抜きの仕事は専門職の人がいて、その報酬は年間米四俵（約二四〇キログラム）、水路からの配水人夫の日当は八〇銭で、そのための村民負担は反当り（一〇アール当り）一円五〇銭ほどでした。

用水路の「溝サラエ」は区役（公役地区農民の出役）で行い、堰（いぜき）はコンクリートではなく粗朶（そだ）でつくつたので、毎年水がかりの田を持つ農民が負担しました。

また水不足の年には八龍宮で水乞い神事や女相撲を催したり四王寺山に水乞い登山をしたりしました。

3 小倉新池とモチ土手

大牟田池の灌漑用水は、大牟田池下の谷間（ちくし台 若葉台・紅葉丘にはさまれた低地）から光町、宝町、さらには下流の福岡市博多区の水田を潤（うるお）していましたが、現在の小池台から小倉集落にかけての小さな谷間の浦田はすべて天水（湧水・降水）に依存していたのでこの灌漑用水の開発は、大庄屋であった白水喜四郎翁の大きな功績とされています。このことは住吉神社境内にある碑文でも明らかです。

小倉新池から導くこの用水路は、大部分丘陵の上部を通されていますが、凹地を通るときには凹部に堤を築きその上に土管を並べたモチ土手という工法がとられています。また、この水路の大部分は宅地開発のため消滅してしまいました。

4 稲作

種籾（たねもみ）はそれぞれの農家が戸櫃（とびつ）あるいは榎倉の中のダウス（大桶）に貯蓄し、地区内に四方所あった三坪（一〇平方メートル）くらいのタナイケ（種池）に十五日間くらい浸しておきます。

ナエトコ（苗代）は個人でつくったが、十戸くらいの農家は二〇アールくらいの共同苗代を伯玄社の下あたり

につくっていました。

ナエトコの整地は牛馬ですいたあと、平鍬（ひらぐわ）で床面を均一にし、肥料は人糞尿を使用しました。

本田の整地は牛馬耕のあと畦（あぜ）塗りをし、馬鍬（まが）で碎土をし、肥料は大豆玉（だいずだま・大豆粕）、いわし粕、タナイケや溜池のバミ（沈澱泥土）、浦田では山林原野の柴草を主に使い、畦には畦大豆（あぜだいず）を播きます。

田植え時期（五月）は溜池の水量をみて区長が指示しますが、浦田の天水田は各自の判断ではじめます。

田植えの方法は後退植え（後にさがりながら五株づつ植える）で、田植定規、田植綱、控え杭を使う正条植えです。

共同田植えは地区内で四組ぐらいあり、人手不足の家は基山（佐賀県）や南畑（那珂川町）あたりから男一―一円二十四銭、女七〇―八〇銭くらいで雇いました。これを「田植さん」といいました。

田植え時の食事は四食（駄使いは五食）で田んぼでとりました。地区全体の田植えの終了を区長が見とどけて、期日を定めサナボリを行います。

農家では魚を買い、ダゴ（団子）をつくり、加勢人を招いて労をねぎらいます。

田の草取り（除草）は最初は雁爪（がんづめ）打ち、次いでナンナオシ（手取り）、除草機を使い、最後の除草をアガリ草といいますが、この日は田に入らないのが慣例でした。苗代の害虫駆除には殺虫灯（誘蛾灯）を使い、学童を動員して螟卵（めいらん）茎の採取をします。本田の駆除は「油入れ」といい、鯨油などを竹筒から田に入れ、竹ぼうきで稲葉から害虫をはき落します。また、「虫祭り」といって住吉神社で祝詞（のりと）をとえ、御幣（おふだ）をうけて田にさし、地区境の田には大きい竹を立て、落雷で稲が枯れると、その範囲にシメナワを張ります。

ヒエ抜きが終り、稲刈りになると、田で三日干しをし乾田ではそこで脱穀しますが、浦田の稲は自宅まで運んでしました。

5 副業・その他

養蚕は大切な副業でしたが、蚕室まで設置したのはわずかに軒だけで、大部分の農家は座敷や納屋を改造した臨時の蚕室で飼育しました。

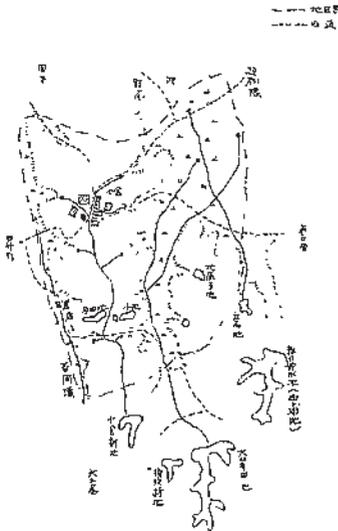
養鶏はほとんどの農家が十〜二十羽を自家用に飼育しました。果樹栽培も二戸が梨をつくった程度で、特筆す

るほどのものではありません。用水路には淡水魚がかなり豊富だったので、水路を三カ所くらいに区切って入札しました。

秋の溜池干しのときは、一般に公開入札しましたが、ウザやタブなどの漁具の種類によって価格の規制をしたため、魚獲量が少ない時は紛争となることもありました。溜池の堤防やムラ山（共有林野）からの採草、薪取りも入札により権利を買いました。

このように、小倉地区は、資源に恵まれなかったため、あらゆる資源も地区の収入にするために努力しました。

旧小倉区農業用水系略図



旧小倉区農業用水系略図

交易・運搬

1 市と買物

雑餉限の十日戒（とうかえべす）、太宰府天満宮、箱崎八幡宮などの祭礼市で買物をするのは、他の地区と同じでしたが、姪浜の愛岩さんや西新の藤崎宮は火災予防や牛馬息災に効果があるとしてお参りするものが多勢ありました。

冠婚葬祭に必要な買物は、雑餉限、老司、博多あたりまで行きましたが、日常の買物は地区内のクマチャン店やアラチャン店（いづれも松尾姓の地元の雑貨店）ですませました。

行商人は博多の鮮魚、醤油、富山、基山の菓売り。鞆のサキガケは半道橋（福岡市博多区）などからやってきました。

地区内には牛馬商（仲買人）が二人（養原 曾吉さん 西村末松さん）がいましたが、馬ツクロイには麦野（博多区）の日隈さんが来しました。

2 販売

地区内には大地主はなく、自作農家や自作兼小作農家が

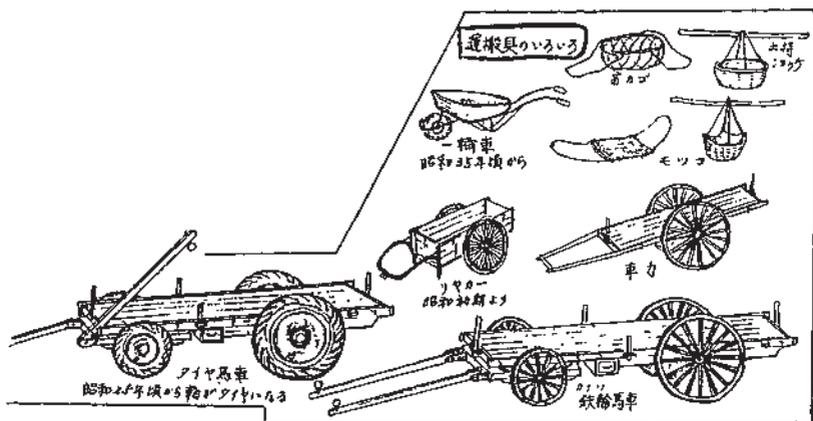
多かったので、大量の米の販売をするものではなく、大部分は博多や井尻方面に下肥（しもごえ）取りに行くとき手車力に積んで売りさばっていました。地区の地主は博多の中間町や警弥郷の人で、ヨマイ（余米）は年が明けて暖くなつてから納入するのが普通でした。

3 運搬

雑餉限駅（現・国鉄南福岡駅）までは往還（おうかん）がありましたが、鉄道を利用することは少なく、博多に出るには、博多道といつて須玖一番託―養島（現、美野島）―住吉―春吉―中洲という経路をとりました。運搬手段はほとんど手車力（てじやりき）で、ふつうは米を五俵くらい（約三〇〇キログラム）積みました。



茶わんのセリ売り



運搬具のいろいろ

信 仰

1 住吉神社

字村中にあります。明治五年十一月三日、那珂郡小倉村村社に定められました。

『筑前国続風土記附録』（以下『附録』と略称）に「住吉神社、産神なり。祭る所は住吉三神也。此村いにしへ住吉村住吉宮の神領なりしゆへ勧請せし事縁起に見ゆ。祠は村の南林中にあり」とあります。

現在、周辺は都市化が進んでいますが、この境内約五〇〇坪の鎮守の森は静かなたたずまいを見せています。

住吉三神とは、表筒男命（ウワツツオノミコト）、中筒男命（ナカツツオノミコト）、底筒男命（ソコツツオノミコト）のことです。

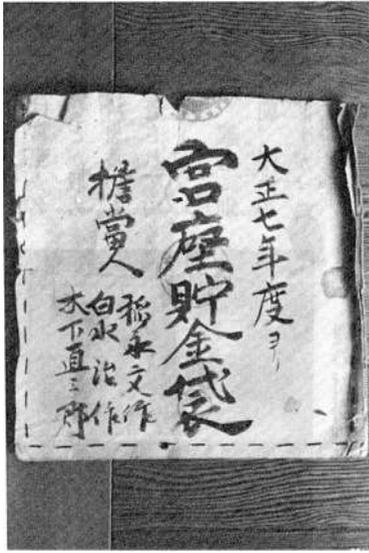
『日本書紀』によれば、伊弉諾尊（イザナギノミコト）が黄泉国（ヨモツクニ）から逃げ帰り、筑紫の日向（ヒムカ）の橘小戸（タチバナノオド）で祓除（ミソギハラヘ）したとき生れ出た神で、住吉大神（スミノエノオオノカミ）と呼ばれます。

航海守護の神・国家鎮護の神として知られています。

祭礼は、昔は九月五日（旧曆）注連下し（しめおろし）九月九日祭礼でしたが、大正時代は十一月九日注連下し十一月十七日例祭と変り、現在は十月九日注連下し、十月十七日例祭となっています。

神社の祭祀や管理は宮総代を代表とする宮座（氏子）によって行われてきました。

宮座は昔は十戸でしたが、現在では二十戸です。例祭は一年交代で、十人が参列します。座元（当番）は二十一年に一回まわってくるようになります。



宮座の貯金袋

宮座は世襲制でしたが、近年では転出その他の理由で譲渡、売買されることがあり、宮総代西村繁太郎さんの

話では、大正十年ごろから三割ぐらい入れ代りがあったとのこと。宮座の権利は米二俵が相場でした。

例祭の日取りは次の通りです。（ ）内は現行。

十一月八日（十月八日）夕方から当年当番の宮座連十名が座元の家でシメナワない（注連打ち）をします。大注連一本（双柱用）。長注連一本（拝殿用）。庚申用二本。翌九日は注連下しの日です。座元では二十人分の献立を用意します。（別記）

十一月十七日（十月八日）は大祭日です。

祭事は古式にしたがい、簡素厳肅に執り行われます。

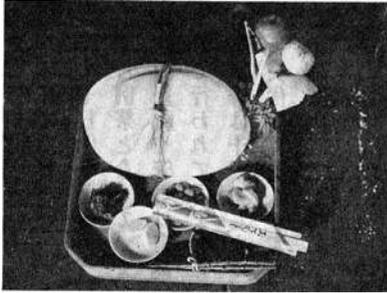
出席者は神主一名（春日神社宮司）、宮座連十名。拝殿正面神殿を背にして神主、左右に五名ずつ着座、この席次（拝殿法式）は昔から一定しています。以前は男衆だけでしたが現在は婦人も参加できます。

祭礼次第は次のとおりです。

- 一、開式の辞（神主）午後一時
 - 一、修祓の儀
 - 一、祝詞奏上
 - 一、玉串奉奠（座元）一同拍手
 - 一、三々九度 御神酒を一回ずつ土器（かわらけ）で、あとは五升の酒を十名で飲みほす。
- あとは五升の酒を十名で飲みほす。
- 一、頭渡し（当番渡し）。当年の座元と次年度の座元

が対座して五合入りの大盃の御神酒を飲みほし、「祭り帳」を送ります。「祭り帳」には宮座人名表、祭祀記録などが収められており、新当番のものとで大切に保管されています。

例祭の御供物、献上（別記）は当日の朝、座元の家で準備されますが、料



牛の舌餅

理の材料内容は古来のしきたりが厳密に守られています。「牛の舌餅」と「半煮えの料理」については次のような言い伝えがあります。昔、神功皇后が三韓に出征の途中、この村に立寄られ少憩されたとき、村人は遠路の旅



頭渡し

情をねぎらうため、誠意をこめてもてなしました。しかし、急ぎのことで時間がなく、料理は半煮え、餅はやわらかすぎて牛の舌のような形になり、そのままわらばとに包んでお持ち願ひ、前途の無事と御武運を祈ったのでした。この心温まる氏子たちの接待方法が宮座のお供えのしきたりとなって、今日まで続けられているのです。宮座の費用は、字原端（博多区昭南町）と字松添（自衛隊病院）の二反歩の祭田で賄いました。戦後、これを売却して新しく字上池田（ちくし台区）に買い求めましたが、売却、現在はその利子を神社の運営費にあてています。

その他、神社に関係する祭祀、年中行事には、嫁ゴの尻叩き、左義長・虫追い祭り・盆綱引き・火たき籠りがあります。別項「年中行事」を参照下さい。

なお厄祝いもありますが、別項「厄年」を参照下さい。現在の神殿・拝殿は明治二十九年（一八九六）の再建で「邑社住吉神社神殿拝殿建築費決算書」によれば、建設費は合計五百七拾貳円四拾銭五厘となっています。以後、四回にわたって神殿・拝殿の屋根替えが行われています。拝殿が瓦葺きになったのは昭和三十四年からです。

神社には、天保十四年（一八四二）以降の再建、屋根

葺替えの棟札（むなふだ）が計八枚残されています。
神社関係の古文書、文化財（建造物・奉納品）は次のとおりです。

- 『当社住吉宮御祭礼先代記録末社八龍宮御祭礼記録』 宝暦八年九月五日改メ牛丸住 松尾藤兵衛元軌
 - 『住吉宮御祭礼拝殿法式』 文政四年
 - 『那珂郡小倉村産神並別社神事一切記録之写』 天保五年九月五日
 - 棟札 八枚
 - 石灯笼 正徳元年（一七一）九月一日
 - 奉納面一対 享保三年（一七一八）
 - 奉納神鏡台座 天明元年（一七八二）
小倉村長 重吉
 - 奉納面 天明元年（一七八二）
 - 神額 寛政十一年（一七九九）武末種美
 - 石鳥居一基 文化二年（一八〇五）
 - 八龍宮鳥居一基 嘉永七年（一八五四）
 - 絵馬十点 安政三年 村正白水喜四郎奉納ほか
- （別記）
住吉神社例祭記録 大正拾参年正月改正 筑紫郡春日
村大字小倉 宮 座 中

宮座連中 拾人

本日料理献立

御 茶

御盃酒

一、落付 す志替次第

一、甘酒 替次第

一、生魚吸物 一ツ

一、味噌吸物 一ツ

一、と志よふ汁 一ツ

（どじょう汁）

一、かめ煮（がめに）

一、ぬた系

一、押へ盆 一鉢

但し蓮根、荒芋、焼豆腐、こんにゃく、牛房、板

付式本

本 膳

一、平 たた里

一、なます

一、赤飯

一、豆腐汁



宮座引渡帳

一、メ打 夕 酒巻升

十一月九日 酒七升

十一月十七日 酒五升

十一月十七日祭典用御備物

一、牛のした餅

数三十三 但し三ツ重 拾巻人分

外二巻ツ切餅入用

右八御備餅迄白米巻斗式升ヲ用ユ

但し十一月十七日朝毎年掃除致し置居事

一、柿 巻ツ 一くし

一、栗 巻ツ 一くし

一、切餅

切マビキ 一くし

里芋

一、ひらき豆 一、あをいて（青茹で）

一、ところ（山芋に似ているが固く苦味がある）

一、里芋吸物 一、打蒔 三升三合

一、新蕨 式枚

右拾巻月九日注連卸御初穂

大正拾參年一月改之

右、住 神社御祭礼前二ヨリ毎年拾巻月拾七日 御祭典
有之候間末代迄此記録ヲ以テ御祭礼可有之候也

神官 藤野

一、西村繁太郎

白水一三三

四、稲永 行雄

松尾 友吉

五、阿部由五郎

白水又一

八、白水 鶴吉

松尾 金吉

九、松尾 新助

白水 次郎

二、西村増次郎

白水 治喜

三、稲永 文作

養原 岩吉

六、西村 熊吉

稲永浅次郎

七、松尾 鹿吉

稲永 栄吉

十、稲永 久助

白水宗太郎

住吉神社 神主 祭典 式 拜殿 座席

2 八龍神社

八龍神社は住吉神社の真向い、字堂園の台地（現小倉
区公民館のあたり）にあったのですが、明治四十四年住
吉神社に合祀されました。祭礼は十月初午の日です。

十名の宮座によって執り行われます。当番は一年交代
です。



水がめ

『附録』には、八大龍王社とあり、水の神様で、水利の便が悪い小倉村ならではの神社です。往時旱魃の時は、豊後久住高原の龍神湖の水を頂き、竹筒に入れて持ち帰り、御神体の水がめに収めて神官僧侶ともども護摩を焚いて、雨乞いの祈禱を行いました。稻永文雄さんによれば大正十五年ごろ、四王寺山（太宰府市）の水がめ山で八龍宮の水がめの蓋をあけて春日神社の宮司によって雨乞いの儀式を行った記憶があります。また、西方の松尾キクノさんによれば、尊父の故正憲さん（天台宗）は旱魃のときは八龍宮に三日三晩お籠りをして雨乞いの祈願をしていたといっています。

天保五年の『神事記録』

に寛政三年（一七九一）の記録として次の記事があります。

「先年大日照り有之候節根付相成兼候節、村民甚困窮仕折柄同社え祈願有之候処、大明神も感応したまいして俄に大雨ふらせたまいし折柄根付も心よく相廻り誠に同社の御

神徳によって恐れ奉り、村民大いに祝い之に依って新に御宮座と号し猶又相改る」また同じ記録に「安永二年（一七七三）村役人の許可を受け荒地をおこし神田を定め」とあります。小倉字上池田の神田は米七俵がとれましたが、戦後は換金して利子を宮座の費用にあてています。

八龍宮について次の文書が残されています。

- 一、宝曆八年（一七五八）八龍宮御祭礼記録
- 一、文政六年（一八二二）八龍宮御祭礼記録
- 一、天保五年（一八三四）神事記録
- 一、明治十五年 八龍宮御祭礼記録
- 一、昭和十二年 八龍宮御祭礼記録

3、大弁財天神社

大字小倉松尾弘太さんの屋敷内の高台にあります。地元では「弁天さん」と呼んでいます。社殿は小堂で、昭和五十二年の改築です。松尾家の『大弁財天神社記録』によれば創建は天明元年（一七八一）で、祭神は宇賀大明神です。天明七年小倉村三十三名で宮座を組織し、五十七年間祭典を続けて一時中止になりましたが、先々代松尾文平翁のとき再度十五名で宮座を組織し、主神を弁財天、宇賀神を相殿（あいどの）として合祀し、今日にい

たっています。宇賀神も弁財
天も農業の神様です。

社前に、注連縄を張った板
碑型の大石が横たわっていま
す。『附録』に「宇賀神ウシ
マル社の側に大石有。弁財天
と言」とあるのがそれです。

神社の記録には祭礼執行の段
取りや、宮座献立などのしき
りがこと細かに誌（し）る
されています。宮座連は、松
尾弘太さんを代表に現在十四
名、毎年三名を当番として神社の管理や祭礼の執行にあ
たっています。例祭日は十一月の初巳の日です。



大財弁天

「伝教大師御真影」は、鎌倉時代のものではないかとさ
れています。また、天台教地神経の巻物、寛政三年（一
七九二）の「栗田御殿御令旨」が残されています。

不動信仰とは、除病延命、怨霊払いなど民衆の現世利
益と強く結びついています。三宝荒神を主体とする不動

院は明治維新まで五百軒の檀
家をもつ、旧那珂郡の取締役
でした。今日でも近郷一円の
信奉者のお参りが跡を絶ちま
せん。

不動尊

松尾さん宅には文書（もんじ
よ）とともに三宝大荒神・伯
玄阿舍羅尊御守護（夏わずら
いのお守り）、三弁財天姿の
版木が残されています。

（8座頭さんの項参照）



5 猿田彦神

小倉には二体の猿田彦神の石碑があります。一体は葉
師堂のそばにあり御影石の立派なものです。もう一体は
住吉神社境内の向って左側の細い道ぞいにあります。

小倉は東・西・前方・大南・寺屋敷と五つの組に分かれ

4 不動院（慶定坊）

天台宗総本山延暦寺

真言宗高野山別格本山大圓院

（昭和四十一年改宗）

西方（にしかた）にあります。齋主は松尾キクノ（妙道
）さんでいつの時代から祀られたのかよくわかりませ
んが、言い伝えとして、現存の不動尊、恒武天皇御寝影・

ていましたので、住吉神社北側を西方・前方・大南・薬師堂側を東・寺屋敷とそれぞれに分かれて猿田彦神を祀っていました。

猿田彦神は「お庚申さま」と呼ばれ、農業の神として崇敬され、この二組で別々に庚申講をもっていました。

猿田彦神の石碑は、最初に置かれたところから変えられた例が多いのですが、小倉では変わっていません。



猿田彦神の横薬師堂

6 庚申講と庚申分け
「猿田彦神」の項で述べたように、当時の小倉では五つの組に分かれていました。

住吉神宮の二組と、薬師堂の二組とがそれぞれに庚申講をもっていました。

初庚申の日には猿田神社（福岡市藤崎）で猿面を買ってきて各家の勝手口に掛けていました。講の日には各組とも二十人くらい集り当番が三升の白餅を搗き、稲苗三把、酒一升、料理などを床の間に供え、猿田彦神と三匹の猿が描かれた掛軸をかけたました。（庚申の申（さる）から猿の信仰に結びついたものでしょう）。お参りのときは線香を焚き柏手を打って拜んでいました。料理は女の人を作りますが、講の座では男の人たちだけで夜中まで話はずんだようです。

出（で）づら（村の共同作業）のときには住吉宮側と薬師堂側との二組に分れていろいろな区の公役をしました。これを庚申分けと呼んでいました。

7 荒神さま

五月の庚申の日（一般的には旧暦五月二十八日）、カマドの神様である荒神さまのお祭りが各家で行われました。お供えは稲の苗を三把あげて拜むだけでした。カマ

ドの神は女神で、火の管理はもとより、作物から一家一身の庇護までしてくださることから、荒神は作神様としても信仰されています。時期になると、アタダさんと呼ばれる座頭さんが塩原の方から来ていました。琵琶(びわ)を持った目明きの座頭さんが来たり、盲目の座頭さんが来たりしましたが、家ごとにくまった座頭さんが来ているようでした。土間の荒神様の前に御幣(ごへい)を切って供え、ごぎを敷いて座り、琵琶を弾いて一年分の荒神祓いをしました。座頭さんには昼食に豆ご飯を出します。お礼には「米三升三合と塩」というのが相場でした。座頭さんは一日に二軒から三軒くらいをまわりました。

村の者は「座頭さんな、一年の米は春で稼せがっしやあな」と言っていました。

8 座頭さん

松尾正行(しょうぎよう)という座頭さんがいて、当時、那珂郡の座頭の総取締りをしていました。琵琶を持って今的那珂川町や粕屋町あたりまでの檀家五百軒を、一年に四回まわって病氣、厄払い、地鎮祭、荒神祓い、亥ノ子、水神あげ、雨乞いなどの祈禱をしていました。その間に、天台宗なので、宝満山の峰入り行事に参加し



お 礼

比叡山などにも登られたそうです。檀家からは座頭さんとも、坊さんとも呼ばれていました。三至荒神を拝むときは時間がかかって夜中になることはいつものことでした。お礼は米一升三合または三升三合と餅でした。「寄せ祭り」といって何軒かが一緒にお祭りすることもありましたが、檀家の数が多いので、ほとんど一年中家(うち)をあげてお祭りに出かけなければならなかったそうです。

現在は五代目として松尾キクノさんが跡をついでいます。

⊕ 水神あげー井戸を埋めるときに井戸神様を抜くこと。

9 英彦山参りと伊勢参宮

他の区と同じく小倉でも「ひこさん参り」は盛んに行われていました。

所要日数は二泊三日で、講員には村中から餞別が贈られ盛大な見送りをしました。

コースは春日原―瓦田―水城―二日市―天山―甘木―上秋月―江川を通り小石原で一泊した後、英彦山にお詣りしました。

帰りは添田經由で帰ってきました。講員の帰りを待ちわびる子どもたちは、村はずれ(井尻)まで迎えに行き薬師堂の所まで一緒に帰り、そこでおみやげのお菓子をそれぞれもらいました。

講員の一行は馬の首に英彦山ガラガラをたくさんつけた馬の背中一ぱいにおみやげ物を乗せて村中をまわり餞別をもらった家々にお返しを配りました。

伊勢参宮は二十歳から三十歳くらいまでの者の中から二十名ほどで講を組み雑餉隈駅(現南福岡駅)から汽車に乗って行きました。大正末期までは着物でしたが、昭和に入ってから、洋服をあつらえました。時代によって路順や費用・旅装もいろいろのようです。

〔「人々の生活」の「英彦山参りと娘札打ち」「参宮同行」の項参照〕

10 大師講

薬師堂のそばに、お大師さまを祀った小祠があります。

毎月、二十日に各組とも集って「お大師さま」の講を行つています。

昭和初期まで各組とも十八名くらいでした。オコモリは年に一回で盛大にしています。

11 火タキゴモリ

神無月(かんなづき)、今の十一月に住吉神社の神様は毎年出雲に行かれます。十一月二十八日には村内の者が集り住吉神社の境内で各組に分かれオコモリをしながら神様のお帰りを待ちました。当番がガメ煮などのご馳走をつくり、みんなで「火」を取りかこみながら酒を酌みかわします。神様が出雲からのお帰りというので「縁結び」にもご利益があるといわれ、特に若い女性のお参りが目立ちました。それに一年の豊作感謝の意味もこめられていました。

12 雨乞い

長い間、雨の降らないときは雨乞いをしていました。

八龍宮で雨乞いをしたり、あるときは旧筑紫郡全体で水瓶山(みずがめやま・太宰府市)まで松明(たいまつ)をつけていったりしました。大正十五年(一九二六年)に八龍宮では松尾正行さん(座頭さん)を招いて三日三晩雨乞い祈願を

してもらいました。

雨が降ったときには「ご願(がん)ほどき」といって神様にお礼をしました。お礼はあらかじめ「箱崎浜の社日汐」「お百度参り」「男角力」「女角力」などと書いておみくじを作って神主に引いてもらいお告げということでも当り札どおりのお礼をしました。

一回だけでしたが女角力(おなごずもう)が当り、それはそれは、大にぎわいでした。

13 屋敷神

○お天神さま

松尾寅太さんの屋敷に、通称、お天神さまと呼んでいる地祿天神が祀つてあります。

ご神体は花崗岩の自然石です。明治四十二年の記録が残されています。それによれば当時、神田が七畝ちかくありました。毎年十一月二十五日を祭日として、宮



水瓶山での雨乞い

座は七名の人たちで維持しています。

○はったいさもん

松尾寅太さんの屋敷うちにあります。ご神体は自然石で、神名は「はったいさもん」といわれていますが、お稲荷さんではないでしょうか。心身に病いがあるときに拝めばよくきくとされています。

○お稲荷さん

稲永修一さんの屋敷の左側奥の祠(ほこら)にはいったお稲荷さまがあります。

最近、祠の改築にともない大根地神社(筑紫野市)にお願いして位(くらい)を上げてもらったそうで、毎朝ご飯とお水をあげて参拝しているとのこと。

○お地藏さん

同じく稲永修一さんの屋敷の右側築山の一角に祀られているお地藏さんがあります。石臼と自然石が安置されていますが、この築山は当家の鬼門にあたり、災難除けとされています。まわりを掃除するときなどは、まず塩をまいて消めを行わないと障(さわ)りがあると云い伝えられています。

○ お薬師さま

宇村中に古い薬師堂があります。宝永元年（一七〇四）創立の棟札があります。『附録』には、薬師堂に「観音も有（あり）」と出ています。お観音さまも一しよに祀られていたのかもしれない。お座はありませんが、病気を治してくださる薬師さまとしていまも近郷一円に篤い信仰があります。

目が悪くなったときは半紙に名前・年齢・病名を書いてはり付けます。治療のときは線香とお水をあげて拝みます。



薬師如来二百二十年祭(住吉神社にて昭和9年)

○腰の神さま
稻永繁雄さん宅にありますが、小さな祠に自然石と丸い石がご神体として祀られています。昔は石塔の宝珠でした。腰のけがや病気があるときに良く効くそうで、治療したときは「かずらの捻ぢった（杖によく使われる）状態の木を五〇センチくらいに切って奉納します。

14 上ノ山のお観音さま

上ノ山は白水宗規さん宅の屋敷うちということで、いつのころからか、お観音さまのお世話はお家を中心に行われるようになりました。お座は昭和二十四年につくられたもので、それ以前にはありませんでした。

お籠りは四月十七日、六月堂（または、オヨド）は旧六月十七日でした。六月堂の時は白水家で前日から作ったガメシバマンジュウをお参りのお年寄りや子どもたちに接待しました。大正の初めごろまで、春秋の農閑期に那珂郡三十三ヶ所の一つとしてお参りがさかんでした。その中に郡中札の娘さんたちの団体が鈴を振り御詠歌を歌いながら巡礼していました。その時もオコワやおすしの接待をしました。



腰の神さま

15 三尊板碑

前方の稲永啓祐さん方に御影石の三尊板碑があります。

— 自然石で表面だけ平面加工して三つの梵字（ぼんじ）が彫られています。真ん中に阿弥陀如来を表す「キリク」、左に勢至菩薩（せいしほさつ）の「サク」、右に観世音菩薩の「サ」の三字があります。

これは独尊よりも三尊一体にお願ひした方がより効果的だと考えられたものでしょう。このように阿弥陀如来を主尊とした形式を阿弥陀三尊といいますが、ほかにも阿弥陀如来を主尊としながら、他の脇侍（わきじ）と組



阿弥陀三尊

み合わせたものもあります。宗派や經典等によつて尊の組み合わせが違ってきます。この板碑は啓祐さんのひいおじさんが屋敷うちで井戸を掘っているときに発見されたそうで、それ以後、当家で祀られています。なお当家では千手観音として祀られています。

のキリクは千手観音を表わすこともあります。しかしこの場合は組み合わせからみると阿弥陀三尊ではないでしょう。

16 墓地

竹ヶ本に小倉区の共同墓地があります。

そこには寛永四年（一六二七）の銘のある大きな石柱群があります。入口に地藏板碑と三界万霊塔があります。地藏板碑は花崗岩の一枚板に地藏菩薩が浮彫りされたもので、やや風化していますが、錫杖や顔立ちのやさしいお姿は現在もはっきりとわかります。



地藏板碑



共同墓地の墓石群

また、三界万霊塔は生あるものすべてに仏性を認め、人間と他の生物との間に区別などないという意味を表わしています。

お寺でよく見かける「三界万霊碑」は三界万霊塔のもとになっていきます。またそれは月々の二十九日に供養する位碑でもあります。

います。

同地より地藏菩薩の石像一体と、馬守護神の石碑が大谷小学校建築のとき発見され、現在、旧中央公民館の敷地に祀られています。

○馬捨て場(うますてば)

柚木に二つ池と呼ばれる池がありましたが、そのあたりにあったとされています。

病気やけがで死んだ牛馬を葬った所です。

17 馬に関するもの

○馬つくろい場

大南にありました。蹄鉄などをつけ替える所で、その時期になると、蹄鉄つけ替えの触れがまわってきました。

○馬解き場(うまときば)

これも大南にありました。江戸時代、牛馬を食べる習慣がなかったため、牛馬が死んだり、病気をしたりすると、馬解き場で解体し、そのあと肥料にしたといわれて

年中行事

主として旧暦です。

1 歳末

○大掃除は元来、六月の土用に部落一斉にして、掃除がすむと役場の掃除検査というのがありましたが、年末にも各家でスス掃(は)きをします。

○正月用の箸(はし)を栗ハイバシといい、部落の持ち山(東のカタ)に栗の枝を取りに行き箸を作ります。また、オカザリ用のモロモキ、ユズリハ、サカキシバも取りに行きます。

門松、シメナワはしません。

お重(かさ)ね餅は次の所に供えます。

神棚(オ神様)

井戸(水神様)

土間のクド(オ荒神さま)

小屋(農具や穀類を収納するところ)

便所(外にある)

蔵(くら)

○年越しソバ 大晦日の年越し

ソバキリのダシは「にわとりこむ」といって、鶏の骨でとりました。

○絵馬(エンマ) 毎年、年末に子どもが各家をまわって五銭、十銭とカネを切って高等科の代表が博多駅前や川端にエンマを買いに行き、子供の名前を書いて、元旦の朝、住吉神社に上げました。

2 正月元旦

早朝、一家の主人が井戸から若水を汲み、主婦が雑煮をつくりまします。雑煮のダシに丸餅を入れ、ほかに鶏、里芋、ニンジン、カツオ菜、焼豆腐、カマボコを入れます。



夏の大掃除

荒神様に供えた三本足の太榎でナマスもつくりましますが、これを「福ナマス」といいます。ダシはイリコでした。そのほかカズノコ、お頭付きとして干しイワシを焼いてつけまします。

朝、住吉サン(神社)に参りますが、近所の年始廻りはしません。

3 三日

早朝、初仕事としてナイ初めのワラ仕事をします。書き初めもこの日です。

4 七日

七日正月といつて休みます。

小倉には東方、西方、大南、寺屋敷、前方の五組(六〇戸)がありました。各組で前日の六日夕方、竹やワラを持ち寄って、道路のミツガナ(三叉路)にこれを組んでホンゲギョーをつくり、七日、早朝これに火をつけて燃やします。

各戸から荒神さまに供えた餅や、タツクリ、干しイワシなどを持参し、「アカガリ(あかぎれ)焼(や)ーこヒビ焼ーこ、泣くもんな口焼ーこ」と唱えながら餅などもつてきた食べ物はその火で焼いて家に持ち帰り、これら

のものを、七草汁の中に入れます。

七草というのは大根、セリ、ミツバ、フツ（ヨモギ、夏わずらいをしないよう）、ヒヨコ草（ハコベ・乳が出るよう）、白菜、カツオ菜などです。七草を包丁の背で叩きながら、片手に杓子（しゃくし）を持ち「日本の鳥と唐（から）の鳥、日本に渡るとき、七草祝おう」と何度も唱えます。刻み終えたとこれを味噌汁の中に入れます。七草汁はコブ、焼アゴ、鶏でダシをとった味噌汁です。「七草があまると、田の草が生える」といって、残さないようにおなか一杯食べます。この七草のゆがき汁を一杯、風呂に入れ、残りの汁を家のまわりに撒くと火事にならないといわれています。

なお、七草がすむまでは爪（つめ）をつんではならなるとされています。それで爪は年の暮れのうちにつんでおきました。

5 十一日

神棚のオカザリを卸（おろ）し、黄粉餅をつくりまします。

6 十四日

○十四日正月といい休みます。

○白ご飯の中に餅を入れますが、これを「力餅（ちからもち）」といいます。釜の中の残りご飯に水を入れて沸かし、これを手タゴに入れ、柄杓（ひしゃく）で家のまわりに「おかゆ一杯、セチ一杯、隣りのカド（カド、前庭のこと）さいもつて行け」と唱えながら撒きます。

○十三日の晩から十四日の朝にかけて、モグラ打ちをします。竹の先にワラを束ねて巻きつけたもので各家のカド（庭）を叩きながら「十四日のモグラ打ち、隣りのカドさえもつて行け」と大声で唱えます。終ると竹は二つに折って、柿の木などのナリモンの木の枝にさげておきます。

○左義長（さぎつちよう）青年が住吉神社の境内に左義長を作ります。松の木を芯（しん）にして竹を添え、ワラをかぶせて高さ十二―三メートル、直径四―五メートルの楕円形のもので、ワラは各家から出します。十四日の夕方六時ごろこれに点火します。

子どもの書いた書初めを竹の先につけて燃やし、これが高く上ると習字が上達するといえます。

○嫁ゴの尻叩き（しりたたき）

ワラを編（あ）んで長さ六〇―九〇センチ、直径六センチくらいの棒を作ります。なかには芯（しん）に竹を入れたものもありました。夕方、前年結婚した嫁ごさんが嫁入り姿の盛装で住吉神社に参詣してくるのを

待うけた小学生の男子が尻叩き棒で嫁ゴの尻を叩きませんが、叩くとき別に唱え言（となえごと）はありませんでした。



尻叩き棒

嫁ゴが家に居着くように、また子室に恵まれるようにとの願いをこめたものだと思います。嫁ゴの尻叩きは第二次大戦中、廃絶していたのを昭和五十七年から復活させました。この尻叩きが終わったころ、左義長に点火します。

7 十五日

小豆ご飯の中に餅を入れて炊きます。残ったものに塩

を入れカユバシラといって食べます。二げついたのが「おいしゅうございました」とのこと。

8 正月の初庚申の日

東組は福岡市の藤崎バス停のすぐ左側にある猿田彦サ
ンに参ります。帰ってくると宿元で親睦をしました。

9 春の彼岸

お寺参りやお墓参りをします。

彼岸餅（白餅やワツ餅）を搗いて嫁の里方、親戚、近
所に互いに配りあいます。

10 五月五日

男の節句。ヒシ餅を搗きます。この日、田ニシを味噌
アエにしたり、ニラと一緒に煮て食べます。土用の丑
の日にも食べましたが、大層おいしいものでした。

田ニシは襦から身（み）を取り出し尻の部分を除きま
す。

11 ノーシロオシ（苗代作り） 五月十五日

水の便宜上、一カ所に共同でつくります。

田植えは七月上旬（新）

サナボリ（田植えアガリ）は部落一斉に休みオハギなどをつくります。

12 才地藏サマのおマツリ

田植えが終ったころ。才地藏サンと才薬師サマとは並んでありますが、子供がそこで米を一合ずつ持ち寄ってご飯を炊いて食べました。

13 田ボメ

七月七日。自分の田に行き「よかお田ね」といってお神酒（みぎ）を田に注いできます。

この日、物干竿の竹を切ると、虫がつかないといいますが。これをタナバタ竿といいます。子どもは稲の葉の朝露をとって、これで習字をします。

14 六月堂

七月八日。昼間、五つの組（大南、前方・西方・東方・寺屋敷）の子どもたちが住吉神社の境内に集って箱庭をつくります。

各戸から銭を切って（寄付をつのつて）博多から菓子を買ってきて、子どもたちに与えます。夜は女や子どもが住吉神社に参ります。

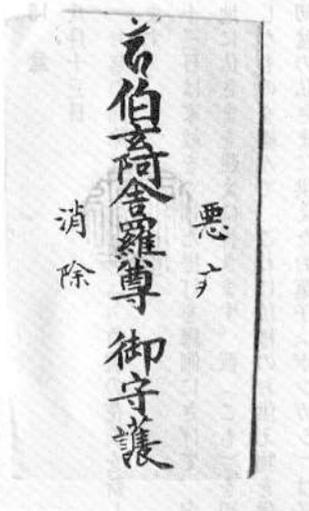
15 七月十五日

博多の祇園山笠の日で、休みます。博多の方から追山の加勢を頼まれて行く青年もありました。この日は田にははいりません。

16 オコモリ

○オハッケン（伯玄）サンのオコモリ

四月二十日 雲雀（ひばり）が軋（さえず）り、菜の花が盛りで現在の宝町交差点付近は一面の菜の花畑が見渡されて、のどかなものでした。オコモリには、各家から酒や料理、ご飯、すしなどをワリコに入れて提げて行き会食しました。



伯玄様のお守り札

七月二十日 夏ゴモリ。伯玄サンは伝染病の神様とも

いわれます。夏ワズライ予防のお守りを配りました。

○八龍様のおコモリ

五月八日

八月八日

○住吉様のおコモリ

三月十五日 厄祝いおコモリ（厄年厄祝い）の項参照）

七月二十八日 夏祭り。虫祭り

十一月二十八日 火タキゴモリ

境内にゴザを敷いて会食しますが五つの組はそれぞれ場所がきめられています。

寒い時なので火を焚くから「火タキゴモリ」といいます。

これらのおコモリは全部昼間です。

17 虫祭り

七月二十八日。虫追い祭りのことで川上の上白水から川下の須玖の方へと子どもたちが鉦・大鼓をたたいて稲田の虫追いをし、他地区との境にお札を立てます。

昼は住吉神社で、各家から持参の料理やソーメンを食べておコモリをします。現在は水利組合の役員だけで、

田に御幣を立てます。

18 盆

○八月十三日

お墓の掃除は十日ごろして、竹製の花筒を新しく立てます。

十三日は家紋をつけた提灯を縁側にさげて、夕方、墓地に仏さまを迎えに行きます。菰（こも）を切って干したものを編んで、これに仏様のお供え物を供えます。初盆の仏さまに供えたお菓子（ボンガシ）は子どもが勝手にとって食べてもいいとされています。

○八月十五日

夕方、仏さまの燈明から線香に火を移しこれを持ってわざわざ遠まわりをして、お墓に仏さまを送りに行きます。途中、道の角々（かどかど）に線香を立てます。仏様のお供物は墓に持って行きます。

19 盆ツナ引き

十五日、夕刻、仏さま送りがすんでから盆ツナ引きをします。

盆ツナはお薬師堂（もとの公民館前の広場）のエナミ（榎）の大木（枯死して現在はない）にひっかけて書

年が引き綱をないます。芯はカズラ周囲はカヤ（カヤを切って集めるのは子供の役目）で三本綱いとし、長さ一五―二〇メートル、直径二〇―三〇センチくらいのもので作ります。

このツナを十五日夕方、住吉神社前で、子どもと青年に分かれて引き合います。

戦前は村の中央四ツガナ（四辻）、現在の松尾ストアの前で行われました。

ツナ引きの始まる一時間ばかり前に「ワッショイワッショイ」と叫びながら、子どもを呼び出して集めます。

三回引きますが、一回引き終るごとに位置を入れ替えます。



区役員による盆綱ない(昭和57年)

また三回とも、引き始めるたびごとに青年の支部長が「祝いめでた」を唄います。ツナは三回目を引いているとき鉈（なた）で中央から切ります。

勝ち負けは問題にしません。

現在は住吉神社前の道路で綱引きをします。

20 社 日（しゃにち）

春と秋と二回あり、この日は各戸で博多の箱崎の浜にオシオイ取りに行きます。このオシオイは毎日各戸の門口（かどぐち）にかけてあるオシオイテボに配って来られます。家人が外出のとき少しつまんで体にふりかけ、外での安全のマジナイをします。

21 時 刻（とき）

区会、青年会、処女会などの集まりのときは、触れ太鼓をたたきます。例えば、青年会は三つとか、処女会は二つとかきめてありました。

柱時計は高価でしたから、容易に買えませんので、講を組織して毎月積立てをしクジであたった家が落して買いました。これを「時計講」といいました。柱時計は明治十年ころには一円五十銭でした。

そのほか傘講、リヤカー講、自転車講などがありました。

なお、雑貨店や医者への支払いは益と暮れ(年末)の二回で大ごとでした。

産 育

1 妊娠・お産

妊娠したことを「サンマイになった」といいます。

出産予定日はツキノモノがなくなつてから十月十日(とつきとうか)目といひます。

2 オビ祝い(オビシ祝いともいう)

妊娠五カ月目の戌(いぬ)の日に嫁の里方から岩田帯(白の木綿一丈)を贈つてきます。これをヘソノババサン(産婆さん)が妊婦にしめさせます。そして、近所の人々を招いて馳走をします。これをタノミ茶といひます。が、お産のさい近所の人から汚(よご)れもんを洗つてもらうからだといひます。

3 出産祈願

産み月前に、本人か代理人かが神功皇后出産の伝説の宇美八幡にお参りして「お水」をいただいできます。この「お水」は陣痛のとき妊婦がいただきます。

不妊のときは里子(さとこ)をもらうか、住吉さまに願(がん)をかけて、児をささがるように祈願します。

4 産児制限

墮胎(だたい)とか産児制限などはありません。普通七―八人くらいは産みました。

5 コンゲツバラ(今月腹)

妊婦の腹がトンガッたら、男の子が生れるだろうと予測します。

○産み月まで百姓仕事をつづけました。

6 妊娠中の禁忌

○妊婦が火事を見ると、ホヤケの児が生まれるといひます。

○近親の葬式には行きますが、帰ると必ず手を洗つて浄めます。

○妊娠中、食べてはいけないものは別にありません。

7 初産

初産のときは里方で生みます。出産の十日くらい前から里方に帰ります。

8 産室

ナンド（納戸）で寝産（ねざん）です。

昔は天井（てんじょう）から吊した縄にすがってお産をしたという話が伝わっています。新聞紙を重ねて綴ったものを敷いて生みました。

9 産婆（さんば）

ヘソノババサンともいいますが、昇町に森山キミという産婆さんがいました。

10 ヘソノオ

保存しておいて、その児が病気るとき煎じて飲ませるといいといひます。

11 ウブ湯

○方角をみて流したといひますが、詳しいことはわかりません。

○アトザンは役場のほうから集めにきました。

12 ウブメシ

出産前、すぐごはんをたいて大黒柱の所に供え、小石をごはんの上に一箇のせませす。

13 ミツメ

出産の三日目に里方からソアツナギの着物とジバン（じゅばん）を贈ります。男児には黄か青色、女児には赤色の着物を贈ります。

小豆ゴハンをつくりませす。

父親が赤子に命名し、半紙に名前を書いて神棚にさげませす。

14 シチャ（七夜）

七日目は別になにもしませせん

15 トコアゲ

十一日目で、この日まで産婆さんが来ました。十五日目ころから起きて仕事をします。

16 産後の禁忌・俗信

○産後二十日間はクド（かまど）の前に立ってはいけないいといひます。

○シイタケ イワシなどの青魚は油気が多いので食べてはいけないといい、アワビを食べるといいといひます。アトバラがせかぬようにとカラクイ芋の茎の干したのを味噌汁に入れて食べさせます。

○乳が出ないときは、佐賀の太田にお観音様の溝掃除をしてくると乳がよく出るといひます。

17 出産見舞い

黒砂糖・アメ・カマボコ・着物などを持参します。

18 お宮参り

男児は三十一日目、女児は三十二日目、里方の母親が抱いて住吉様に参ります。

お宮参り着物(ぎもん)は里方から贈ります。

お宮参りの前に、両親の揃っている人に赤子の髪の毛をちよつと剃ってもらい、あとは床屋につれて行きました。神前で赤子の鼻をつまんで泣かせます。これは氏子にしてもらうためだといひます。

お宮参りの帰途、まんじゅうを近所に配ります。近所の人には、お宮参り着物の紐(ひも)にヒモセンをさげてやります。これはお銭(かね)と生のクサケ(いりこ)とを紙にひねつたものです。

19 モモカ

百十日目。小豆ごはんを一口食わせます。首がすわるようにとお膳に小石をのせます

20 初正月

里方・親戚・近所の人から、男児にはハマユミ、女児には羽子板を贈ります。また女の子にはモチバナ(モチデマリ)といつて柳の木の枝に餅や手製の手マリなどをさげたものを作ります。

21 初節句

三月三日、女児には里方から焼き物のオヒナ様を贈ります。ヒシ餅を搗きますが黄色(クチナシの実で着色)青色(フツモチ)、紅色(食ベニで着色)、それに白のヒシ餅です。

五月五日、男児には里方や親戚からノボリや鯉ノボリを贈ります。

22 初誕生

紅白のお重ねの三升餅を搗きます。これを誕生餅といひます。その餅の上にすし桶をかぶせてその上を踏ませます。これはあとで切つて近所に配ります。男児はワ

ラジ、女兒はゾーリ（赤い布の緒をつけたもの）をはかせ「百まで、百まで」と唱えながら踏ませます。

それから、蔵のカギ、ソロバン、鉛筆、本など十二の品物をならべ、その中から早く取った品物で、その子の将来を占うのです。例えば蔵のカギを取れば金持ちになるといいます。

23 ホウソウ

ホウソウを植えると、あとがかぶれるので米のとき汁に柿の葉と、塩をすこし入れたものをたいて、その汁で着物の上からぬらして着物をぬがせました。

ホウソウを植えた後は、孤がつくといい、山の方には連れて行きませんでした。

24 オゼンスワリ

三歳のお祝い。正月前（十二月）にします。オゼンスワリギモンを嫁の里から贈ります。女兒には足袋やカッポン（下駄）も贈ります。このときポッポオゼン（春日区篇頁55参照）は博多の川端あたりから買ってきました。

25 ヘコカキ

七歳のお祝い。嫁の里方から男児にはヘコ、女兒にはコシマキを贈ります。

25 一人前

男はマエガミゾーに入ったとき、女は処女会に入る十六歳くらいから一人前あつかいを受けました。

厄年・厄祝い

男の二十五・四十二歳、女の十九・三十三歳を厄年としており、この年には一般に災厄にあうので忌み慎まなければならず、とりわけ、男の四十二歳は「死に」、女の三十三歳は「散々」に通じるといい大厄としています。これには前厄、本厄、後厄として三年続きの厄年として恐れられてきました。

男四十一歳、女三十三歳の二月の八日・十八日・二十八日と八のつく日の一日を選び、早朝に、餅を搗き、暗いうちに一升五合餅とお膳にお神酒（みき）、四十一文の銭（女は三十三文）をのせて、人に出合わないようにミツガネ（三叉路）に置いてきて、他人（ひと）に拾



餅あげ

つてもらうと厄が落ちると
いいです。

この餅を厄の餅といい、
色は白・黄色です。餅を捨
てに行くときは男はワラジ
女はゾーリをはいて行きま
すが、婦人にはこれを脱い
ではだしになり、住吉神宮
に参詣してもと来た道でな
い所を通って帰ってきます。
この日、親戚・知人・近所
に餅を配ります。

また、三月十五日区の人たちが集り、四十一歳の男を
住吉神社にまねき、オコモリをして祝います。これを厄
祝いオコモリといいます。厄の者一人一人が拝殿で胴あ
げをされて、厄を落してもらいます。

オコモリの費用は厄の人が負担します。

オコモリが終ると、区の人々は厄の人の家をまわってお
祝いをしました。

右の厄年は「前厄」で厄を落していることになります。

近年、この行事がととのい、祭事の次第を次の通りと
しています。

- 一、修 祓（しゅうばつ）
- 二、祝 祠 奏 上（のりとそうじょう）
- 三、玉 串 奉 奠（たまぐしほうてん）
- 四、齋 主 一 拝
- 五、神 酒 で 祝 杯
- 六、神 殿 で 胴 上 げ
- 七、公 民 館 で 祝 宴

このあと、区の人々は厄の人の家を一軒一軒まわります。

そのほか

- | | |
|--------|------------------|
| ○ガノイワイ | 六十一歳の還暦祝いで赤いチャン |
| ○キノイワイ | チャンコを贈ります。 |
| ○トカキキリ | 七十七歳の喜寿の祝い |
| | 八十八歳の祝い。二升杓の米をナラ |

まための木の棒がトカキ（斗掻き）
で、一斗杓の容量の大きさを年齢の
高さに照応させたものでしょう。

婚姻

1 適齡期

男子は徴兵検査の関係で二十三歳から二十六歳ぐらいまで、女子は十九歳から二十歳ぐらいまでが婚期とされてきました。

2 通婚圏

ほとんどが村内婚ですが、村外婚の場合でも、今の那珂川町や大野城市ぐらいの範囲でした。

村内婚の場合は、大体、相手方の身上はわかっていますが、血統や家柄も重んじました。

なお、小倉と春日とは互に通婚しなかったといいますが、その理由についてはよくわかりません。氏神さまが敵同志（かたきどうし）であったからだという人もいます。小倉の住吉神社は水の神、春日神社は火の神様で互に性（しょう）が合わないのだという訳です。

ちなみに、博多の香椎と志賀島とは互に通婚しないそうですが、やっぱり氏神様同志の関係でしょうか。

3 仲人

信頼のおける知人に仲人（仲立ち）を頼みますが、コ

シウダキといって、仲人のほかに口添えを立てることもあります。

4 見合い

見合いによる結婚が多いのですが、見合いは、婿となるべき本人とその親とが仲人と共に嫁となるべき娘の家に赴きます。そのとき娘はお茶をくむだけでした。

5 シルシ

結婚の話がまとまると、改めて仲人がシルシといって酒一升と肴（鯛一尾）とを嫁方に持参して、祝言の日取りをきめます。

嫁方では、それから近所に嫁入りのオヒロメをします。

6 ムコイリ

嫁入りの日は朝早くムコ入りをします。そして、その朝、婿方からお茶（または朝茶ともいいます）がきます。お茶とは結納品のことですが、金銭ではなく、お茶・酒



見合い

着それにオノシや花嫁の衣裳類（これは七着とか九着とか奇数にします）などの嫁入道具を花嫁方へ運びます。

嫁入り衣裳にはこの中ものから着て行くのです。

お茶の荷物を運んで来た人には、酒肴を出してもてなします。

ムコ入りには、花婿・仲人・親戚など十人ほどが嫁方に行きますが、ムコマガラカシといって花婿と同年配くらしいの人を連れて行きます。

嫁方では本膳を出して、それらの人を迎え、午後三時ごろまでご馳走します。

その間、花婿は嫁方の近所の挨拶廻りをして扇子を配ります。それが終ると花婿は自分の家に帰って行きます。



嫁入り風景

7 ヨメイリ

嫁入り道具は夕方の嫁入り前までに婿方に運びこみます。嫁入道具は・タンス・長持・鏡台などのほか、大・中・小のタライを持って行きます。大は洗濯用、中は子供が生れたときの子供用、小はチョウダライで足の付いた洗面用のものです。

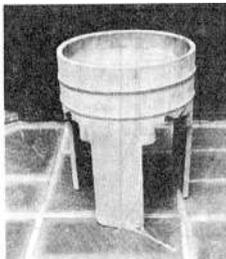
花嫁は実家を出るとき、玄関で平素使っていた茶碗を門の口（カドノクチ）に投げつけて割ります。

花嫁は一旦、婿方の近所に定められた中宿（なかやど）に入って休みます。婿方からは中宿まで弓張り提灯をさげて花嫁を迎えに行きます。

花嫁は両親の存命する婦人に手を引かれて婿方の家の台所から入り、キンタ（砧・木製の踏み台）を踏んであげり、珠数をもって仏さまに参ります。

花嫁はワタボシ（ヤロボーシともいう）をかぶります。花嫁と花婿とは三々九度の盃をし、親子・兄弟の盃は一献です。

それから披露の祝宴となり



チョウダライ

ます。

8 才茶ノミ

翌日は才茶ノミといって、近所の人や男女友達を招きます。人数が多いときは二日間も続くことがあります。

9 仲人への謝礼

仲人にはナカダチ着物（ギモン）といって、着物を贈り、以後五―六年くらいは盆・正月には下駄や酒などを贈ります。

10 青年団へのお祝儀

小倉の娘が他地区へ嫁入りした場合には、嫁ぎ先の婿方では、仲人を通じて小倉の青年団に対して「お祝儀」を包みました。

その金額は五円とか十円とかで当時としては相当な額でした。それは小倉の青年が「嫁入りまで娘を守ってやった」ことに対する謝礼だという意味に解されているようです。

11 嫁の里アルキ

一番アルキ 祝言から三日目

正月アルキ 正月二日。日帰り

才節句アルキ 三月三日

麦ウラシアルキ 麦刈り前

ソクリアガリアルキ 田植え終了後

盆アルキ 初めての盆には夏着物（ナツギモン）をづくつてもらつて行く。

このときタラ（干し鱈）とソーメンを持参する。

秋アガリアルキ 刈り入れ後。

葬送

1 死後の処置

死亡するとすぐ北枕にし、逆さ屏風を立てて一合ゴハンをたきます（平素は一合ゴハンをたくものではないとされています）。これを枕メシといい、箸を一本立て、お花も線香も一本ずつで、お水やおクリダゴといっしょに供えます。神棚には白紙を貼ります。

猫が死者を跨ぐと、死者が起きあがるというので、猫を入れないよう用心します。

2 死亡通知

シラセといい、近所の男子二人が昼でも弓張提灯をさげて、寺・役場・親戚・知人などに通知に行くのですが、電話の普及していない時代のこと、あゆんで行くのですからおおごとでした。

3 湯 濯

近親者が行きます。座敷の畳を裏返して角(すみ)を四つに合わせ、ムシロを敷きタライを据えます。

まず水を入れて、後で湯をそそぎます。かけ湯のひしやくは竹で作り、使用後は焼却します。かけ湯の場合、ひしやくを持つ手を外側に反(そ)らすようにして、湯をかけます。

湯濯後は、形式的に頭を剃り、婦人の場合は顔に化粧をほどこします。

湯濯の水は北の方角に捨てます。

経カタビラ

死者に着せる経カタビラは親戚の者が白木綿(しろもめん)で作りますが、裁(た)つときは缺(はさみ)を用いず手で裂きます。

縫糸はオ(麻糸)を用い、糸の端は結び目をつくりま

せん。

5 夜トギ(お通夜)

シラセをうけた親戚や近所の人たちはお通夜に来ます。香典としてお金を包みますが、これには「仏前」と「香典」があり、香典の方は少額でお坊さんが持つて帰ります。「仏前」の方は仏さまにお供えします。

そのほか死米(しにごめ)やヒキワリゴハンをサカイジユウに入れて持参します。ヒキワリゴハンは黒豆を煎(い)って、皮は枳(ます)の底でごろごろこすつて落し、これを炊(た)きこんだゴハンを炊き親戚の者が持参し夜食として出します。

料理は精進料理ではなく、酒も出します。

6 葬礼用品の調達

葬礼用品は組の人が調達します。

組は十戸―十五戸でした。埋葬は土葬ですから、カメを買い、赤い紙(念仏紙)を貼って前・後を見分けられるようにします。カメにかける縄は左ナイにし、打つてないワラを使います。これをカンカケナワといい、出棺のときカメにかけます。

組の人のうち半数は穴掘りに行き、残りの人は天蓋や

葬式の参列者に出すヨトギ用の竹の箆や墓に立てる竹製のローソク立て（ロクドーという）などを作ります。

7 穴掘り

組の人が五人ばかり、朝穴掘りに行き、夕方まで墓地にいます。

穴掘りの人々には丸型の握りメシ、酒、お煮シメを持たせます。（平素の握りメシは三角形）

穴を掘るとき、初めに年長者が「天の神、地の神立ちのき給え、死の神が立ち入るぞ」と唱え、土を手で四方に払いのけてから掘り始めます。

穴掘りの人々には丸型の握りメシ、酒、お煮シメを持たす。穴は八尺以上深く掘ります。

穴の周囲にはローソク立て（ロクドー）を六本立てておきます。

墓穴の場所の地取りは区長がきめ、墓地の図面に○印をつけておきます。

8 納 棺

湯灌がすむと、遺体には経カタビラを着せ、珠数を手にかけて、手には手甲、足にはキヤハンをつけます。頭から頭陀袋をさげさせ、枕メシ、オクリダゴを入れ、六文

銭はカメに入れます。夫が死んだ場合には、妻は髪の毛を切つてカメに入れます。

カメの底にはカマスカムシロを敷いて遺体を安置します。遺体は膝をまげ、両膝の前方に左右の手をまわし、足を抱く形にして両手の指を組み合わせます。

遺体の顔の向いた方向のカメの外側に赤い念仏紙を貼ります。

9 出 棺

出棺前、座敷で棺を左まわりで三回まわしながら「願戻し。願戻し」と唱えます。

棺を担ぐ人は前後二人で白紙の緒のゾーリ（以前はワラジをはいたが、これも白緒）を座敷からすではいていました。担ぐ人は前の人が年長者です。出棺の際は、故人が使用していた飯茶碗を玄関で打ち割ります。

出棺後はナカエとニワを掃除しますが、このとき使用するホウキはナカエボウキ・ニワボウキの二本を荒ナワで作ります。使用後は焼却します。

女（おなご）はオイ出シ髪というのを結びます。葬式の当日は会葬者にヨトギを出しますが、精進料理（シイタケ、コブでダシをとつた料理で魚は使わない。味噌汁、煮豆、酢のものなど）で酒も出します。

料理は組の人が担当し、使用した竹の箸は後で焼却します。

10 葬列

葬列の順席は

① 僧侶

② モトダイ

注 稲ワラを円筒状に束ね、七カ所をワラでしばり

中ほどのところを白紙で巻きます。その穂先に死者の枕元にもしてあつたオヒカリから火をうつして組内の長老が持ちます。

③ 旗

④ テンガイ

⑤ ハコ(梓)

⑥ 竹製のローソク立て

⑦ ゼンの綱

注 カメの前方に白木綿を結びつけて綱として近親者が手をかけて引きます。

⑧ 一般会葬者

なお、近親者は白緒のゾーリをはきますが、帰りには途中でこれをぬいで、はだしであるいて来ます。

11 埋葬

カメは念仏紙が西の方に向くように埋め、ローソク立て(ロクド)も埋め、土マンジューをつくり、棒グイ(墓標)を立てます。モトダイは埋葬前に焼却します。

なお死者の一番いい着物をカメにかぶせて行きますがこれはカメと一緒に埋葬します。

12 灰ヨセ

埋葬の翌日、身内の者が墓地に行き、土寄せして土マンジューを整理し、ハコ(梓)を据えます。ハコは白木作りの四角な梓で土ドメとして置き、土マンジューの土が散らないようにします。

竹製の花立てを立てて花を供え、線香立ての小箱も置きます。

13 俗信

北向きにした竿に故人の着物(袷の類)を通し、身内の者が昼夜をとうしてそれに水をかけて乾かないようにします。死者が火の山を越えるので熱い目にあわないようにといひます。

なお、仏壇のローソクの灯も絶やさないようにつけておきます。それは一週間くらいつづけます。

14 同齡感覺

同年配の人が死んだことを聞いたら、ほかの人が両耳をふさいでやります。

15 法 事

初七日

四十九日 一升餅をついて四十九個に分けます。

一周忌

三回忌

七年忌

十二年忌

二十五年忌 普通二十五年忌までです。

五十年忌 五十年忌、百年忌法要を営むことは

百年忌 めずらしいことです。

民間療法

○神経痛・腰痛

- ツボに灸か鍼をする。
- 腫れもの・吸い出し
- ヒラクチの皮の干したものをつける。

• ドクダミを煎じて飲む。

• ドクダミを自分で、汁をつける。

• ドクダミを自分で、はりつける。

• ビール(ヒル・蛭)に吸わせる。

○擦り傷・血止め

• ゲンノシヨウコ・ドクダミを土用の丑の日に干したものを、もんでつける。

• モグサをもんでつけると、血止めになる。

○歯 痛

• 痛むところに、梅干の皮をはりつける。

○下痢止め

• 六月の丑の日に採ったゲンノシヨウコを煎じて飲む。

○胃腸病

• センブリ(センブリ)を干して煎じて飲む。

• 熊の胆を飲む。

• ゲンノシヨウコを煎じて飲む。

○咳止め

• 大根のおろし汁を飲む。

○熱さまし

- 梅干を黒焼きにしてお湯にひたし、その湯を飲む。
- 卵酒をつくって飲む。

・生姜（しょうが）の擦ったものを、蜂蜜と酒か、湯をまぜて飲む。

・ナメクジの黒焼きを飲ませる。

○血圧降下

・タコを乾燥させて煎じて飲む。

・頭とか頸に灸をすえる。

○脚 氣

・足に灸をすえる。

○中 耳 炎

・ホトトギスを、カタ炭の上にトタンを置いて、その上で黒焼にして油をとり、黄色いベターツとしたものを耳の中に入れる。

蓄膿症にもよいという。

・キジン草（ユキノシタ）をしぼって耳の中に入れる。

○頭 痛

・邪悪とりといって、こめかみに白い貼り薬（頭痛こ）をはりつける。

○打身・捻挫

・ひざぼうずや肩に水が溜ったときはステゴバナ（彼岸花）の球根とヒマの実の油とをまぜ、足の裏（つちふまず）に貼る。

・肩こりのところに貼る。捻挫のところに貼る。

・里芋一個と生姜をすったものをメリケン粉でねってつける。

・卵の白身とクチナシとをメリケン粉にまぜてぬる。

・ユリの根をすってつける。

○脳病・神経症の人。

・シンの木を煎じて飲ませる。

○破傷風

・伊勢エビの殻を煎じて飲ませる。

・コシヨウの木の本根三本を三合の水が一合になるまで煎じて、飲ませる。

○やけど

・馬れい薯をすったものをつける。

・馬のフンをつける。

・種油と亜鉛華（あえんか）を混ぜて塗る。

○婦人病

・スモウトリ草の根を煎じて飲む。

・サフランの根を煎じて飲む。

・クソゴラ（からすうり）の根を煎じて飲む。

・オトギリ草を煎じて飲む。

○しもやけ

・クソゴラ（からすうり）のねばねばしたジゴをつける。

もの病氣に対しても、こんな考え方もありました。

○あかぎれ

- ・シヨウガの葉・莖を干したものを煎じてつける。
- ・黒ごうやくをつける。

○目の病氣

- ・目ヤニはホウサン水でよく目を洗う。
- ・トラホームはホウサンを湯でとかして洗う。

○肺 炎

- ・鯉の生き血に酒を少し入れて熱が下がるまで飲ませる。
- ホロセ・オコゼ（毛虫）がさわった時

- ・塩でもみ、こする。

○蜂さされ・虫さされの時

- ・齒くそをつける。
- ・サイテン草をもんでつける。

○胸の病氣（結核）

- ・スツポンの生き血を飲ませる。
- 百足（ムカゼ）ににくいつかれた時

- ・小便をつける。

注 頭などが痛くても、一日ゆっくり休んでいると治

りました。多分疲労からきていたものでしょう。医者にかかるといふことはめつたにしませんでした。

注 ゴクモン（米・麦）を売らにや金のなかとやもん。

死にや死んでよか。ふとりや、ふとつてよか」子ども

諺（ことわざ）と言ひ習わし

○行儀にかかわること

- ・味噌桶と女（おなご）が外に出りや、雨の降る。
- ・ヨサリ（夜）手足の爪をいっしょにつむな。

- ・夜、下駄をおろすな。

- ・ヨサリ（夜）鶏の鳴きまねをすると人が死ぬ。

- ・鳴く鶏には脚に水をかけよ。

- ・他所（よそ）に出かけるときは玄關から出て、お汐

- 井をかぶつて出かけよ。

- ・めしを食べてすぐ横になると牛になる。

- ・夜明けに鳴く鶏が夜中に鳴くと、「よその宝をトツテ

- コーコー」といって喜ぶ。

- ・神仏のお供えは日の入らんうちにあげる。

- ・口びるの薄い人はしゃべくり。

- ・井戸に金物を落とすと水神様のたたらつしやる。（そのときは塩を入れて「ニヨ！ニヨ！カンニヨウ」してお祓いする）

○健康にかかわること

- ・産後に針仕事をすると目を悪くする。
- ・雷が鳴っているとき、ヘソ（臍）を出しているところをとられる。
- ・歯が抜けたら、足を揃えて、上の歯なら縁の下へ、下の歯なら屋根へ投げ捨てる。

- ・妊娠中に兔を食べると四つ足の子ができる。
- ・妊娠中、火事を見れば赤ホヤケ、葬式に出れば黒ホヤケの子ができる。

○産後二十日間はクド（かまど）の前に立つな。

- ・冬至十夜（とうじとうや）に東光寺ぼうぶら（かばちや）を食べると中気にならぬ。
- ・神経痛の人が痛みだすと雨模様になる。
- ・産前の正月、一番に男のお客が来たら男の子が産れる。

○死にかかわること

- ・北向きに家を建てるな。
- ・着物を左前に着てはいけない。
- ・葬式に新しい物をおろすものではない。
- ・死亡を知らせに行くときは、一人で行くものではない。
- ・足袋（たび）をはいて寝ると、親の死にぬにあえぬ。

・死人は北枕に寝かせる。

- ・葬式から帰ったら、塩で浄（きよ）めて玄関からはいり。

・柿の木から落ちると死ぬ。

○吉凶の予知にかかわること

- ・神様・仏様に夕花（ゆうばな）をさすもんではない。
- ・夕花はうれいにつかう。
- ・犬の遠吠えは泥棒よけになる。
- ・朝、女が一番目に玄関から入ると縁起がわるい。男が入ると縁起がいい。
- ・くやみ鳥（がらす）が、カアアカアと鳴くと人が死ぬ。
- ・竹に実がつくと飢饉の年。
- ・コウゾウ（ふくろう）がコイコイコイと鳴くときは人が死ぬ。
- ・ヨサリ（夜）の蜘蛛（くも）の下りは親に似ても殺せ。
- ・朝、蜘蛛が下ると一日縁起がよいので、フツクラ（襖）に入れよ。
- ・蜘蛛が手をひろげて下ると、おみやげもなんにも持たてこらつしゃれん（家に来る人が）。
- ・早起きは三文の得がある。

・裁(た) った着物の上にヘラ・ハサミ・モノサシをのせると、よか子どもができる。

・近くの火事するとき、女のおコシ(腰巻)を振ると、火がこちらに来ず、類焼をのがれる。

○動物にかかわること

・青ビキ(蛙)が木の上で鳴けば雨。

・アブラ蟬が朝から鳴けば暑くなる。

・蟬が鳴くと晴れる。

・サル(申)・トラ(寅)八日は着物を裁(た)つな。

・鶉(卯)の羽根重ねで、また着物ができる。

○自然現象にかかわること

・夏、西の油山に雲がかかれば夕立ちが来る。

・入道雲が出ると夕立ちが来る。

・秋の夕焼けは鎌といで待つとれ。

・月暈(かき)がさすと天気が悪くなる。

・月にばんやりと輪がかかると雨。

・陽が高入りすれば雨。

・朝焼けは雨。

・庚申様の前には雨が降る。

・七夕竿(たなばたざお)は虫がつかない。

・七夕には一粒でも雨が降る。

・西の夕立ちは速く来る。

・東の夕立ちは満作。

・霜上げじゅうやは時雨(しぐ)れる。

・ホーソー花(れんげ草)が咲いたら苗代の用意をせんならん。

・瓜の一番なりはお荒神様にあげよ。

・宝満山に雲がかかれば雨。

○夢見にかかわること

・夢見が悪るかつたら南天を見ればよい。

・悪い夢を見たら、南天の葉を頭にさす。

・夢見が悪るかつたら南天が食う。

・悪い夢を見たら、人に言う前に南天の木の所に行き

「バフに食わする、バフに食わする」と三回言う。

・悪い夢を見たら、人に言う前に南天の木の所に行き

「バフに食わする。センダリマタオキノワカ」と言う。

・雪の積る夢はよくない。

・火事の夢はよくない。

○植物にかかわること

・ビワ・イチジクは人のうめき声を聞いてふとる。

・屋敷に竹を植えてはいけない(張り負ける)。

・九月の十五日までにワセダイコ(漬物大根)は蒔け。

・椿・桜は主人の首の落つる。

○住居にかかわること

・ (家の造りが) 左住いは、女の権力が強くなる。

○気質・人情・風土

・ 春日の酒呑み、小倉のばくち。

・ 小倉の養子にいくよりか、ダラの木に登った方がよか (小倉の田んぼには蛭が多い)

民話「伯玄 (はっけん) どん」

1 夜さりの田すき

むかし、小倉の村に正直者の大男が住んでいました。

名を伯玄 (はっけん) といい、村の人たちは「伯玄どん、伯玄どん」と親 (したし) みをこめて呼んでいました。

体 (からだ) が大きいうえに、力も人一倍ありましたので、仕事をさせると村じゅうで伯玄どんにかなう者は一人もいませんでした。

大男で働き者ですから、食べる方も村一番で、伯玄どんのダバラ (駄腹・大めし食(ぐ)らい) は誰ひとり知らぬ者はありませんでした。

「仕事幽霊、食い弁慶」といつて大めし食いのくせに、仕事好かずが多い中に、伯玄どんは自他ともに許す仕事上手の仕事好きでした。

田畑の仕事がいそがしくなる季節には、あちらから呼ば

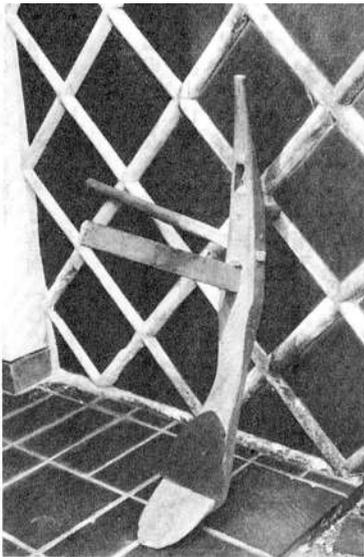
れ、こちらから呼ばれて、朝から晩まで働きました。

ある年の秋、伯玄どんは西 (西方) にしかた) のこと) の旦那どんのところへ田すきに庸 (やと) われました。

伯玄どんは早速、大きなニギリメシのはいつた弁当箱をふるしきに包んで、ゴタイ (五体・背中) にきびりつけ (むすびつけ)、牛に持立て (もつたて) 犁 (すき) をつけて田んぼにはいろうとしました。

それを見ていた旦那どんは伯玄どんの弁当ぶろしきのふくれようにタマガツテしまいました。

旦那どんは、いつちようからかってやろうと思って、「伯玄どん、あんたア、田すきの(が)いきいぎよう(た



もつたて犁

いへん)速かつて聞いとるばつて、田すきはあんたがしよるつちやのうして、あんたがかるうとる(背負つていゝ)弁当がしよるつちやろう」と言つたからたまりません。

旦那どんの話が終らないうちに、伯玄どんの顔が見るみるうちに真っ赤になりました。

胸のところできびつた(むすんだ)ふるしきをほどくが早い、持立ての大どりつけ(右手で握(にぎ)る取手(とつて))に弁当をぶらさげました。「そげなこいうなら、弁当が田すきばしつきるかどうか、よーと見よつてつかーさい」と言つたが最後、伯玄どんは田んぼのアゼマクラ(土手)にどーんと腰を据えると、またたきもせず弁当をにらみつづけました。

旦那どんがどんなに謝(あやま)つても、伯玄どんは尻ベタに根がはえたように、グスとも動きません。

「伯玄どん。いまたア(今のは、ぞうたん(じょうだん)タイ。弁当が田ばすつきるもんかい。こらいちゃんナイ(許してください)頼むけ、牛のハナグリ(鼻木)ばとつて、あんたが田ばすいちゃんナイ」

旦那どんは、テスリコンボー(拝み倒すように)して一日中頼みつづけました。

日が暮れると、伯玄どんも少しシリのコンパユウなり

(尻がくすぐつたくなる。気の毒になる)ました。そして「わかつちやりや、よかと(理解しておられたら、それでいいのです)」とひといいました。

そのあと、伯玄どんは、よさり(夜)のうちに、ひとの二日分の田をすきました。

2 畦(あぜ)ぬり

旧暦五月は田植えの時期で、田植えのことを「五月(ごがつ)」ともいいます。

もうすぐ五月というとき、伯玄どんは小倉村の草野というところで、田んぼの畦ぬりをしていました。

畦ぬりというのは、田植えの代(しろ)かきの前に、壁土を塗るように、畦に田んぼの泥を塗りつけることです。畦が低くなつていたり、畦にモグラの孔(あな)があると、水漏れがするので、畦を高くしたり、孔をふさいだりするのです。

伯玄どんが畦ぬりをしているところへ、雇い主の旦那どんが来て、「伯玄どん、あんたが(の)畦のぬりよう(ぬり方)は、ちーつた(すこし)低つかバイ。ちよこつと雨の降りや、すぐくえて(壊れて)しまふバイ」といいました。

「そんなら、高こうしまつしょう」と、ひとこと 伯玄

どんが言うど、持っていたユウ楸(伊予ぐわ)を思いつきり使い始めました。それから先は、畦を高くすることだけを考えて畦ぬりを続けました。畦はみるみるうちに高くなり厚くなり、そして大土手になりました。

こうしてできたのが草野池ですが、村の人たちは「伯玄どん池」とか「伯玄どんの五月池」とか呼んでいました。

3 仕事上手 (じょうず)

仕事上手と評判の高い伯玄どんの田すきを見ていた村人が「こんくらのコゼマチ(せまい田)ばすくとい、こげんウネ(畝・カマボコ型で作物を植えつけるところ)のよごうどりや(ゆがんでいると)、オオゼマチ(広い田)ばすくときや、どげんなるじやろうかい」と、わざと伯玄どんに聞えるように言いました。

伯玄どんは、その村人をにらみつけて言い返しました。「あんたが目はギシネラミ(岸にらみの意。ひんがら目)じゃなかな。あたつか(わたしが)オオゼマチばすいたら、どげんなるか、よーと見よんナイ」と、言うが早いから博多の方を向いて、すき始めました。道も田んぼも、おかまいなしです。那珂川に沿って、どんどん進んで行きました。止(と)めても無駄と知っている村人たちは、「浜まで行きやあ、それから先は行かれめえ」とだまって

見ていました。

ところが浜まで来ると、こんどはトンボ返りして(折り返して)御笠川に沿(そ)って登りだしました。驚いたことに小倉村のそばを通りすぎてても止ろうとはしませんでした。伯玄どんのうしろにはすきおこされた黒い土が一条の筋となつてどこまでも続いていました。

しかし、御笠川が関屋から大きく左に折れて、前方に宝満川が見えてくるころ、お天道様はすでに西の天拝山に隠れようとしていました。

伯玄どんはここで持立て(もったて)を牛からはずして、すき先についている土をコサギ落しました。

今でも筑紫野市に針摺峠という日本一低い峠がありますが、それはこの時にできたものといいと伝えられています。

4 肥(こえ)取り

夏のある日、伯玄どんは博多の町まで肥取りに行きました。

田畑のこやし(肥料)にするために、町方(まちかた)に行つて米や麦と交換に下肥(しもこえ)を取らせてもらいに行くことを、肥取りといいました。

車力や馬車のなかつた昔のことで、伯玄どんは馬の背

(せ)の左右に大桶(おおたご)をうせ(「うする」とは牛馬に荷をつけること。死語)、くろすてん(暗いうち)からうちを立ちました。

町の人が朝御膳(あさごぜん・朝食)をすませるころから、急いで手水場(ちようずば・便所)のだるごえを汲み取りはじめ、日中の日照りをさけておそひる(遅い昼食)ごろには帰ってくるのが、むかしからのならわしになっていました。

ところが、この日はみんなが昼カラ(午後)の仕事がひとくぎりついて、オチャノコになつてもまだ、伯玄どんは帰つてきません。痛い主の旦那どんは心配になりました。

「あの働きの者(もん)の伯玄どんがヘツバク(ムダ話)言いよるわけもなかし、どうかしとるにちがわん。腹もなえとろう(すいているだろう)。いっちよう迎いい行つてごう」と、博多道を下つていきました。須玖村、横手村を通つて、三宅村にはいりました。右手は塩原といい一面に青田が広がっています。左側はすぐ山になつてい



ドンガメ (野つぼ)

て、その中にひととき大きな木がこんもりと繁つてるところがあります。ここは「石投げ地藏」が祠られているところ。このお地藏さまは子どものお神さまといわれ子どもが病気をしたとき、お地藏さまから石をもらつてきて、悪いところにあてておくと、すぐよくなるといわれています。

旦那どんがこのお地藏さまの近くまでくると、見覚えのある大桶(おおたご)が二本、道端に並べておいてあります。おやつと思つて近づくと、横寝をした馬の頸(くび)に、伯玄どんがせつせとお地藏さまの石をこすりつけていました。

伯玄どんはカ克蘭(日射病)をおこしてたおれた馬を、人の子と同じように一生懸命に看病しているのでした。

ここは、伯玄どんが迎いに来てもらつたところなのでその後、向野(むかいの)と呼ばれるようになりました。

5 縄ない

むかしは雨や雪でホカ(外・田畑のこと)仕事ができない日には、男はワラ仕事、女は針仕事をしました。

ある雨の日、伯玄どんは縄ないを頼まれました。ハナワ(小縄)一つぐり(縄を直径五〇センチぐらいに巻い

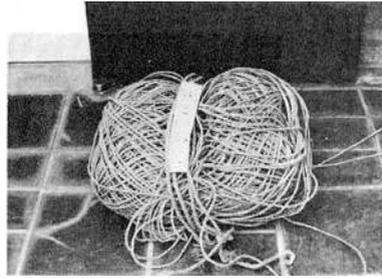
て束ねたもの)をなうのが男のヒシテ(一日)仕事とされていきました。

縄ないを頼まれた伯玄どんは、一寸(いっすん)でも長くなおうと朝ごすと起きから(起きるとすぐから)はりこみ(精を出し)ました。一心不乱に一日中ない続けた伯玄どんのつぐりは、同じ一とつぐりでも大きさがまるで違います。

夕方、伯玄どんがない上げたハナワ一とつぐりを届けに行きました。カドノクチ(表の入口)まで出てきた頼み主の旦那どんは、伯玄どんのカタゲテ(かついで)いるつぐりの大きさに、たまがつてしまいました。

「こらあどうか。こげん大(お)つかつぐりはうち(家・自分の家)にやいらん(入らん・要らん)ばい」と旦那どんが言い終ると、伯玄どんがきびすを返すのが、ほとんどいっしょ(同時)でした。

伯玄どんは、うちに帰ると持ちかえった大きなたつぐり



ハナワつぐり

をこみ溜めにほからかして(なげすてて)しまいました。それまつぐり。

○ 伯玄どん について

「はくげん」についての最も古い記述は寛政十年(一七九八)に福岡藩に献上されたという『筑前国続風土記附録』に見られます。「(小倉村)ヒノクチに松二株植り。はくげん塚と言(いう)。」

むかし、はくげんという剛強なるもの居たりし事、里民伝へいへども、いたつかハしければもらしぬ(わずらわしいので(記録を)省略した)。また『附録』の後につづいて著された『拾遺』には「伯玄といひし強力の者」として登場します。

今から二百年前には伯玄伝説がすであつたことがうかがえます。

さて、「伯玄どん」と呼ぶ人と「伯玄さん」と呼ぶ人がいます。どちらでも構わないと思いますが、年配の人ほど「伯玄どん」という人が多くなりますから、おそらく古くは「伯玄どん」といわれていたのでしょう。

「丑(うし)どん」「ムコどん」は今でも使われていますし、戦後でも、医者どん、目医者(メーシヤ)どんは、かなり通用していたことから「どん」は「さん」以前の

古い言い方と推測されます。「伯玄さん」と言えば、伯玄社を指すことが多く、「伯玄さま」のときは、但玄社だけを意味するようです。

現在の伯玄社は昭和四十一年、伯玄社遺跡調査の後、ほぼ旧社と同じところに改築されたものです。

それ以前の伯玄社は、現在地よりももう少し高い位置にあり、一番下から四〇段ぐらゐの石の階段がついており、頂上には「伯玄の松」といって、見事な大松が勢よく枝を張っていました。登り口には井戸があり、きれいな水が湧いていたので、田んぼ行きよりの飲み水にしたり、手洗いなどに使っていました。

伯玄どんは死の床にいたとき「あつたか（わたしが）南口（みなみぐち）で流行病（はやりやまい）と遺言した南の方にいけちゃんない（埋めてください）」と遺言したそうです。伯玄社の前は、今でも三叉路（みつがな）になつていますが、旧堂があつたころは、このミツガナで一月七日の朝、ホンゲンギョウがありました。

おとなたちは「小倉の疫病は、南から来るけ、ここで止（と）めよるとたい」と子どもに教えていたそうです。

伯玄どんは体が大きく、コッカもん（頑健な男）で働き者とされていたためか、村うちではもとより近隣の人

人の信仰も厚かったと言われています。

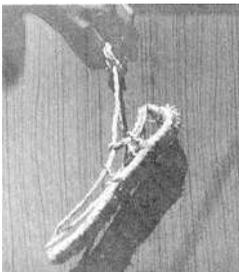
オコモリには、小倉以外の野添や、沖からも必ず集ってきて、にぎわっていました。

また、お堂には二尺以上もある大ワラジが奉納され、線香の煙が年中絶えなかつたということです。

伯玄どんがはいっていたワラジについては、こんな話が伝わっています。

ワラジは一番先の方をハナオといい、反対の後の部分をアトガケといいます。このハナオとアトガケのあいだに、チチまたはミミというヒモ通しが左右に二つずつ二対（に）ついで付いています。このチチにヒモを通し、足の甲でヒモを結ぶわけです。

ところで、伯玄どんのワラジとは言えば、このチチが二対ではなく、三対（ついで）付いていたということです。実際に三対つてみると、伯玄どんのワラジは十六文ぐらゐになりそうです。



ワラジ

小倉区関係生活年表

自 明治 四年
至 昭和十七年

明治四年	一八七一	白水喜四郎病歿（六八歳）。
五年	一八七二	小倉惣代百姓 白水儀作・組頭義原清五郎 同白水伊平 同西村又三郎・庄屋 義原弥十郎・戸長佐伯小平。住吉神社村社に列格。
六年	一八七三	須玖小学校創設（戸長武末六平氏宅借宅にて）。
九年	一八七六	大区・小区発足・那珂郡は十三大区。
一一年	一八七八	嘉穂郡から竹槍一揆起る。筑前一带に波及し、福岡県庁にいたる。那珂・御笠・席田の郡役所を山田村（現大野城市）に置く。
一七年	一八八四	住吉神社神殿屋根葺替え。
二二年	一八八九	「住吉神社例祭記録」改正。
		小倉・須玖・上白水・下白水・春日の五カ村を合併して春日村とする。
		総戸数四一六。人口二、三八九。
		九州鉄道株式会社、博多―鳥栖間開通。雑餉隈駅開設。
		福岡でドン（午砲）発射。
二五年	一八九二	須玖小学校を春日村・臼佐村共立第一春日尋常小学校と改称。現、春日区にあった「春日小簡易科」は第二春日尋常小学校と改称。
二七年	一八九四	小倉新池築造。白水喜四郎顕彰碑建立。
二九年	一八九六	住吉神社拝殿再建。
三二年	一八九九	産業組合法制定。春日村信用組合発足。
		「筑紫郡是」・「春日村是」成る。

三五年	一九〇二	「住吉神社例祭記録」改正。「春日村曰佐村学校組合」を解散。 第一春日尋常小学校を昇町に移転、春日尋常小学校と称す。三七年高等科を置く。 八龍神社を住吉神社内に合祀。
四四年	一九一	小倉村にはじめて電灯点(つ)く。
大正三年	一九一四	桜島の大噴火。火山灰飛来し正月の門松に降灰。住吉神社屋根檜皮ふきかえ。 この頃、春日尋常小学校教員月給八円五〇銭。この頃「処女会」発足。
四年	一九一五	春日村青年団小倉支部発足。
一一年	一九二二	春日村消防第三分団(小倉)発足。
一二年	一九二三	伊勢参宮(二三名)九州鉄道開通。春日原駅設置。「住吉神社例祭記録」改正。
一三年	一九二四	「春日村信用組合」を「信用購買販売利用組合」と改む。
昭和四年	一九二九	小倉・沖に競馬場開設。
五年		
六年	一九三一	渡辺鉄工所(軍需工場)千代町より移転。福岡「ドン(午砲)」廃止。
一四年	一九三九	「春日村主婦会」を「春日村婦人会」に改称。
一五年	一九四〇	九州飛行機株式会社(渡辺鉄工所航空機部改め)工場拡張のため沖・野添地区へ移転。(土地売買価格、坪当り宅地六円・田地四円) 波止上池、柚ノ木池埋立て。住吉神社で雨乞いの祈禱をする。
一七年	一九四二	小倉字立石に陸軍造兵廠の工員住宅建築。住吉神社神殿屋根葺き替え。

あとがき

「春日市の民俗」シリーズとして、「春日区編」「須玖区・岡本区編」につづいて「小倉区編」を出版することができました。

調査のまとめや原稿書きは、それぞれの担当者が当りましたので、文体や用字・用語には多少の相違がみられます。原則として「土地のことば」は片仮名を使うことにしていますが、例えば「お荒神様」と「お荒神さま」など不統一のままにしています。また、

「英彦山参り」などは時代やそれぞれの団体によって、日数や道順も違ってきます。

こういうものは、どちらが正しく、どちらが間違っているということはないので担当者の原稿をなるべく生かすようにしています。

本書の発行に関係した人々は次の通りです。

○調査・編集指導

春日市教育次長 白水清陽

春日市社会教育課長 諸岡泰三

春日市文化財係長 大楠泰幹

春日市文化財主事 永田茂

元春日市文化協会会長

白水昇

○調査部門および執筆担当者

大正時代までの小倉部落の沿革と地誌

人々の生活

家族構成

住居

服飾

食習

山田稔

平田善積

山田稔

清永久仁子

白水和幸

篠原繁樹

清水久仁子

松永美吉

大矢部尚一

松永美吉

清永久仁子

山田稔

農作業・交易・運搬
信 仰

年中行事・産育・婚姻・葬送
厄年・厄祝い

民間療法・諺と言い習わし

民話「伯玄どん」

小倉区関係生活年表

○執筆責任者 松永美吉

○挿し絵(警弥郷)

○写真 真 山田久雄 黒木康友

○編集

編集委員長

委員

○話者および資料提供者

白水昇

成吉重春

松尾茂作

黒木康友

下田宣男

橋本謙次

杉山茂

西村健一

松尾守康

山田稔

西田義昭

西村勇三郎

清永久仁子

永田義三郎

稲永義邦

松永美吉

結城繁三郎

白水ヨネ

山田稔

白水義雄

白水ヨネ

山田稔

西村繁太郎

白水ヨネ

清永久仁子

松尾弘太

武末チヨ

平田善積

白水宗規

松尾トモ

芹野八重子

松尾寅太

松尾ユキノ

平田善積

稲永文雄

松尾キクノ

山田稔

白水義規

清永久仁子

白水義規

中村喜一

白水義規

平田善積

白水義規

白水昇

白水義規

黒木康友

白水義規

山田稔

白水義規

篠原繁樹

白水義規

○監修

小倉区長

成吉重春

杉山茂

白水和幸

中村喜一

芹野八重子

大矢部尚一

本書の発刊に当っては
春日市教育委員会並びに
福岡県教育委員会のご指
導とご援助を賜りました。

むかしの生活誌

小倉区編

昭和五十八年十一月二日発行

発行者 春日市郷土史研究会

(春日市文化会館内)

福岡県春日市大字小倉六七三番地の一

令和六年九月二日発行

復刻版 春日市協働推進部文化財課

発行者 (春日市奴国の丘歴史資料館内)

福岡県春日市岡本三一五七

印刷・製本 有限会社 成光社

福岡県福岡市南区大楠一―二十九―三三

